

第五九回 岸田國士戯曲賞 最終候補

ささやきだに

囁谷シルバー男声合唱団

作／角^{すみ}ひろみ

「登場人物」

(登場順)

松田

(松田明)
まつだあきら

宮本

(宮本和彦)
みやもとかずひこ

蛭子

(蛭子史郎)
えびすしろう

千鶴子

(泉千鶴子)
いずみちづこ

幹夫

(松田幹夫)
まつだみきお

加奈

(井上加奈)
いのうえかな

細野

(細野治)
ほそのおさむ

北野

(北野正平)
きたのしょうへい

沢田

(沢田あゆみ)
さわだ

山深い集落、囁谷。

廃校となつて久しい囁谷中学。古い木机と木椅子と窓がいくつか。

窓の外、林の隙間に古い木彫りのマリア像。両手を広げた横姿。

小さい風が吹く。木々の葉が小さく擦れ合うと、誰か数人の囁く声のするような。

どこか陰鬱な谷。

70歳ぐらいの垢抜けない男（松田）が、人目を忍んで静かに歩いて来る。

で、また黙る谷。

○松田とマリア

夏。午前。

松田、マリア像を見つめて囁く。

松田　マリア様マリア様、囁谷マリア様、お助けください。今朝、目ざめた時、俺は、ベッドの上で、自分が一人のしぼんだ老人に変わってしまった。…は、嘘じゃろ？って何べんも見たんですけど、腹の肉はだらしう緩んで垂れ下がるとるし、立つべき地点立ってねーし、なんーでか左膝の関節がえれー痛えーし、どう見ても、やっぱり俺は、老人に变身してました。

…ね。

松田、ちよつと両手を開いて、マリア像に見せる。

マリア像と同じ格好。無原罪の。

松田　マリア様、そんなはずねかろう。昨日の晩俺、井上と宮本と蛭子と、あと京子ちゃんと、笹越の町へ降りて、いい感じで飲んだんですよ。けやき通りに初めてできたカラオケ「キャンドル」。

70歳ぐらいの眼鏡にワイシャツの男（宮本）が楽譜コピーの束と古いメトロノームを手にして、教室に入って来る。

宮本、窓の外の囁きを耳にする。

松田　「囁谷中学卒業生の会」って、キャンドル、えれー盛り上がって、えれー歌って、井上のバードなんかやたら上手くて、イスの上立って踊ったりして、いい気持ちで帰ってきて俺、

ベッドに入ったんですよ。…京子ちゃんと。やーいい夜じゃったねーとかいって囁いて、毛布かぶって、脚をからめて、目を閉じて――

松田、ぎゅっと目を閉じる。

松田 ……ねえマリア様。これは何かの罰でしょうか？

夜明け、なんか脚の先から冷えて冷えてたまらなくて、目を開けたら、俺は老人で、隣に寝とった裸の京子ちゃんは、夢みてーにおらんようになっとりました――。マリア様教えてください。どうしたら俺は、元へ戻れるんでしょうか？

静寂。

松田 なんか言うてくださいよ、囁谷マリア様！（マリア像の胸に手を伸ばす）

宮本 あっ、（低く囁く。窓の壁に身を寄せて）

松田 え、

宮本 やだ。

松田 え、え、

宮本 今触ったでしょう、

松田 いえ、今、

宮本 私に触った。

松田 誰。

宮本 誰って、マリアです、囁谷マリア。

松田 マリア様…え男？

宮本 女神マリアですよ。

松田 嘘じゃろ、

宮本 触ったでしょう？私の胸に。

松田 触っとらんです、

蛭子 触っとりましたよ、左のおっぱい。私見てた。（低く囁く）

70歳ぐらいの山作業着の男（蛭子）が楽譜コピーの束を手にして、教室に入ってくる。

松田 誰。

宮本 誰って…友達です。

松田 友達とかおらんし、(見回して)

蛭子 神々は、いたるところにいます。

宮本 います。

松田、窓にくっついて教室の中を覗いてみる。

宮本・蛭子、もっと壁に身を寄せてしのぐ。

松田 ホント誰。

蛭子 あなたこそ誰。

松田 子供の昔からようこけー来よーりました。

宮本 昔、

松田 この坂下ったとこの、松田工務店のせがれです。

蛭子 では松田、懺悔しなさい。マリアの胸を揉んだこと。

松田 揉んでねーです、

宮本 誓って言えますか？

蛭子 神かけて言えますか？

松田 え、揉んだのか俺、揉んだのかな、揉んだかも、やーだって俺、今朝からいきなり手脚が衰

えまして、距離感読みづろーなったんで、

蛭子 言い訳ですか、

宮本 ほんっとやだ。

松田 俺だってやだ、こねーな身体、醜い老体。

蛭子 何ですその言い方、

宮本 罰が当たって当然です。

蛭子 あーもっと罰当ててやりたい。

松田 何で!? どうか許してください。昨夜の俺に戻してください。

若くて、未来あふれる俺に、

宮本 戻せない…

松田 え、

蛭子 罪深い、あきらめなさい、

松田 やだ、

宮本 もう戻れない…

松田 やだ、やだって、マリア様ー!

松田、マリア像の広げた手に触れてさがる。

宮本 …まっつん、
蛭子 …まっつん、

宮本と蛭子、窓の外へ顔を出す。淡々と。以降も。

○松田と宮本と蛭子

松田 え、
宮本 わしじゃ。
蛭子 わしじゃ。
松田 え、え、誰、
宮本 いや手―離して離して、
松田 え、
宮本 マリア様の手、
松田 あー、すいません、
宮本 折れるで、囁谷マリア様ももうえれ―歳取られとんじゃから。
蛭子 握ったり揉んだりホンマに罰当たるで。
松田 すいません…(マリア像に)
宮本 何を祈りよーんか思うたわ、まっつん。
蛭子 まーこっち入ってけーや、まっつん。
宮本 始めるで、早^{はや}う。

宮本、メトロノームと楽譜を机に置く。蛭子も楽譜を置く。

松田 あのー、すいません、(窓から挙手) ちょっといいでしょうか？
宮本 でしょうかって何な、気持ちわりー、
松田 どなたでしょうか、あなた方。(挙手した手を差し出して)
宮本・蛭子 は？
松田 知り合いですうか、俺。
宮本 何言よーんまっつん、

宮本と蛭子、少し顔を見合わせる。

宮本 宮本じゃが。

蛭子 蛭子じゃが。

松田 へ…、宮くん…？ エビちゃん…？

松田、小さく呟いて歩いていく。のろのろと。

宮本 まっつん？

蛭子 まっつん？

松田、戸口に入ってくる。

松田 …嘘、宮くん…、エビちゃん…

松田、宮田と蛭子の姿を見て、立ち尽くす。

宮本・蛭子 はい、

松田 変わり果てて…

宮本 何が、

松田 老人じゃが、おめーらまで。

蛭子 何なそれ、

松田 ホンマ何なこれ、昨夜会^{ゆっぺお}ったばあじゃが、キャンドルで。

宮本 何で、昨日は49日^{んち}じゃったが。

松田 は、49日って、

宮本 井上の。

松田 は、いのっち死んでねーが！

宮本 おめー昨日法要の寿司食うたが、

松田 俺食うてねー寿司、

宮本 いのっちの娘の加奈ちゃんが出してくれた寿司、

松田 食うてねー、昨日いのっち全っ然普通に歌いよーたら、

宮本 じゃから昨日は、いのつちの骨納めしたろ、一緒に。

松田 骨納めいうてどけー、

宮本 納骨堂。森林組合の裏手登ったお寺さんの、

松田 行ってねー絶対。

宮本・蛭子 行ったがー。

蛭子 まつつんおめー山門の石段踏み外して、思いっきり転げ落ちよーたが。

宮本 ほんでおめー左膝痛えー痛えー言よーたが。

松田 痛え…、左膝の関節、俺なんーでか今朝からすげー痛え…

宮本・蛭子 ほらー。

松田 …えー…

松田、のろのろと椅子に座る。

松田、左膝を擦りながら、

松田 何で何で、昨日車じゃったよなあー、だって宮くんおめー、新車買ったからいうてやたら我慢して、皆乗せて、笹越の町まで飛ばして、

宮本 新車いうて、

松田 真っ白えースカイライン。ケンとメリーのスカイライン。後部座席にいのつちとエビちゃん
と俺、男3人ツメツメで乗って、助手席に京子ちゃん乗せて山降りて、

宮本 京子いうて…

松田 京子ちゃん、「髪の毛、パーマあててみたんよー」って言よーたがぁー。

パーマ屋の匂いがスカイラインの中えれー充滿して、俺ら京子ちゃんに、
京子じゃっておらんが、もう…

松田 …昨夜、京子ちゃん、俺の家へ来たんよ。あのあと。

宮本 あのあと、

松田 夜中、キャンドルの帰り道。京子ちゃん、…うちの離れに泊まった、ごめん宮くん、(立ち上
がって宮本に)

宮本 (少し笑って) 何じゃあごめんとか。京子はおらん、とっーの昔。

松田 おらんいうて、

宮本 おらんし、

松田 おらんはずねかろう、

宮本 おらんじゃろう。

宮本、松田の前の席の右横へ歩き、椅子の肩に手を触れて、

宮本 —なあ。

松田、その空席を見る。

宮本 笹越池のほとりに座つたらあ。

松田 池…

蛭子 —おらんじやろう。 —いのっちも。

蛭子、松田の右隣の席の右横へ歩き、椅子の肩に手を触れて、

蛭子 —なあ。

宮本、京子の右隣の席に座る。蛭子、井上の右隣の席に座る。

松田、ぼとりと座る。スカイラインの座席位置みたいに。

3人、空席を痛感。

マリア像の陰から70歳ぐらいの地味な女がそっと現れる。

窓枠越しに中を見つめている。風呂敷包みを抱きしめて。

松田、周りの空席を見わたす。

松田 —あれー、…おらんのうちー。そっか、そうなんー。

宮本 スカイライン、乗りよーたんはー、20ー終わりか30ー入ったぐれーじやなー。

蛭子 なー、駆け抜けたなー。もう70入ったなんてなー。

松田 …70…、え…、俺…俺俺俺…

松田、頭を抱える。

宮本 そうかー、来たかーついに、まっつん。

蛭子 なー、訪れてしまうたかー、早えのうちー。70はなー。

宮本 これからわしらも次々訪れるんじやろうなー。

松田 訪れてねーし何も、

蛭子 訪れた奴みんーな最初そう言うんよなー、忘れたこと忘れて。
松田 忘れた…？

宮本、座っていた机を押して動かし始める。蛭子も。

宮本 さ、始めようで、まっつん、丸うなつて。

松田 何始めるん、

蛭子 早速忘れとろう、

宮本 会議じゃが、合唱団の。

松田 おうおう合唱団、余裕で忘れてねーし。囃谷男声合唱団。

宮本・蛭子 おう、

松田、座っていた机を動かす。

松田、次々他の机も動かして、円にしようとして、

宮本 やーやー、そんな机いらんじやろ、

松田 やーやー、だって団員全員来るじやろ、

宮本 来とるし、

蛭子 この3人でもう団員フルメンバーじゃし、

松田 えー、なんでなんで？森林組合の職員宮くん含めて4人と、組合の青年部メンバー20何人、全員団員じゃが。

蛭子 青年部じゃのうて高年部な。

松田 高年…

蛭子 青年部なんかもうとーにねーし。

松田 え、え、じゃどけー行ったんな、あとの青年部員みんな、

宮本 抜け落ちたが。歳取って、歯が抜けるみてーに。

蛭子 毛が抜けるみてーに。

松田、ハツとして、頭の毛を探って、

松田 抜け落ちた…

蛭子 ここ数年でポロポロ抜けたが。山仕事やめて森林組合脱退したり、死んでもうたり。

宮本 ほんでー、こないだ団長のいのちちまで急に行っけしもうてから、絶望的に抜け落ちたが、

松田 そんなんどーすん！いのっちおらんかったら誰が伴奏弾くん？

宮本 やあー伴奏はー…

蛭子 なしの方向で？

松田 アカペラ！？ 無理じゃろ。いのっちおらんかったら音楽監督もおらんのんで？

宮本 そらーわしがー、

松田 無理、宮くんこん中で一番歌イマイチじゃが、

蛭子 うん、残念、

宮本 じゃあー…、音楽監督もー…、なしの方向で？

松田 いのっちー、（林へ）

宮本 何な、

松田 どーすん！？3人だけじゃ合唱なんか歌えまー、

宮本 じゃからー！会議しようー言よーんじゃがあ、こないだからー（松田が動かしすぎた机を戻しながら）

松田 あーあーそーか、会議か。

あーいらんのか、こんなに机は。

宮本 はいはい、さあ松田くん、始めますんで。自分の机こっち向けて、着席してください。

松田、机の向きを宮本と蛭子の方へ向けながら、

松田 …はい、…そうか、…そうだ、…始めようー。

松田、マリア像の窓に対して正面向きで座る。

宮本、まるでいつもしている通例の流れのように、メトロノームを3人の机の中央に置き、

宮本 はい、では囁谷男声合唱団、会議始めます。

向かい合った男3人、ちよつと頭を下げて礼。

宮本、楽譜の束から用紙を取りながら、

宮本 えー、まず取り急ぎ決めにやいけんのはですね、合唱団毎年恒例の、ササモールショッピン
グセンターでのクリスマスコンサートですが、今年は団員3名ということで、どねーす

るかーという問題が、

話の途中で松田、すぐにまたふわーと立ち上がる。

松田 あ、

松田、宮本越しに、窓の外の女を見る。

女（千鶴子）、松田を見つめている。

蛭子 ……松田くん、

宮本 着席。

松田 あの、あそこ…、…マリア様？

松田、ふわーと手を伸ばして、窓の外の女を指し示す。

宮本と蛭子、窓を振り返る。

宮本・蛭子 ……ああ。

千鶴子、ぎこちなく少し笑って、頭を下げる。

○千鶴子

宮本 ずっとそけーおったん？

千鶴子、罰悪そうにうなづく。何度か。

千鶴子、小さく手招きする。

千鶴子 ……明くん。（囁く）

宮本と蛭子、松田を見る。

松田 ……え俺？

千鶴子、うなづく。何度か。手招き。

松田 えーっと俺、ごめんなさい、(誰だか?)

千鶴子 謝らんで。ええんよ、全部聞きよーた。

松田 はあ、えっと、(誰?)

千鶴子 千鶴子。

松田 ……あー、…千鶴ちゃん。「何ーんでも売っとる泉商店」の千鶴ちゃんかー、
変わり果てて…

蛭子 まっつん、

千鶴子 明くん、あの、これ、

千鶴子、風呂敷包みを差し出す。

松田 え？

千鶴子、窓越しに両手を伸ばして、松田に、

千鶴子 取って。

松田 え、何、

千鶴子 いつもの、つまらんもんじゃけど、

松田 いつもの？

宮本 取っちゃられーまっつん、(囁く)

蛭子 取らんでええーまっつん、(囁く)

松田 どっち、(囁く)

千鶴子 来て。はい、(差し出す)

松田 あー(窓の方へ歩いて寄って、受け取る)

千鶴子 みんなで食べて。作りすぎたもんじゃから。ね、じゃ！

千鶴子、足早に去ろうと、

蛭子 ちよー待たれえー、千鶴ちゃん！

蛭子、立ち上がって、呼ぶ。

千鶴子、固まる。

蛭子 …もうええから。今後やめられえこんなん。

宮本 エビちゃん、ええがそれは、(囁く)

蛭子 困るから。毎回毎回、

千鶴子 うち…

蛭子 毎回毎回まっつんを通して渡してから。そりやあまっつんが一番優しいからなあ？

松田 ん？俺、

千鶴子 (首を振って) 違うんよ、うち幼馴染じゃし、

宮本 何なんひがみか、エビちゃん、

蛭子 こんなんしてもろうたって、何ーんも変わらんよ。今更もう、

——あの土地のことは。

蛭子、あの土地を見つめる。みんなも。

蛭子 何ーんでも売っとる泉商店の千鶴ちゃん。

千鶴子 じゃからホントそれは…、…ごめんなさい、(深く頭を下げて)

蛭子 取り返しつかんが、もう。魔王に売り渡しとんじゃから。

千鶴子 魔王いうて、

松田 魔王じゃって！？何い、こりやあえれー事態じゃが、

蛭子 魔王の侵略は進んどるし、

松田 何じゃと、

蛭子 工事も終盤じゃし、わしらあどねーも取り戻してやれんのに、こんな貢ぎもんせられなあ、

千鶴子 違うんよ、うちはただ皆の、…合唱団の応援しとうて差入れよ。

単にホント差入れ、それだけ、

蛭子 困るがあ。わしらあどねーな顔してこれ食やーええん？気持ちのやり場がねーが、

千鶴ちゃん。

千鶴子、うなづく。何度か。

千鶴子 うん…、…そうじゃね…。明くん。

松田 はい？

千鶴子 返して。

千鶴子、窓から手を出す。

松田 え？

蛭子 そういうこと言よーるわけじゃねーんで？

宮本 言よーたが十分。

千鶴子 返して明くん。

松田 やだ。(風呂敷包みを抱え込む)

千鶴子 何で!?

宮本 面倒くせー、

千鶴子 やっぱ駄目、味薄すぎるから、失敗。頂戴。

千鶴子、もうほとんど窓から身を乗り出して、手をのばす。

松田 あ、そうじゃ、じゃあ今食べよう、千鶴ちゃん、一緒に今、(風呂敷を開けよ

うと)

宮本 おうおう、

千鶴子 開けんで!!!

男3人 ……(ちよつとホールドアップ)

松田 ……そんなん、ほんじゃ自分で取りけーや、こっち入って。

(風呂敷包みを手にして故意に戸口へ差し出す)

松田、小さく手招き。さっき千鶴子がしたみたいに囁く。

松田 千鶴ちゃん、

千鶴子 ええ…、ええ…、(両手と首を振って、小さく後ずさる。)

…うちはええんよ、よう入らんよ。ごめんなさい!

千鶴子、逃げるように去る。

松田 千鶴ちゃん、

男3人 ……

間。

松田、風呂敷包みを机の真ん中にそっと置いて、一歩引く。

男3人、一歩引いて包みを見ている。

蛭子 ……な、困るじゃろー。

松田 あー。

3人、やっぱりやり場に困る。

松田 ……何じゃろ、中身。

蛭子 ……煙。

松田 煙？

蛭子 開けたら老人になる煙。

宮本 玉手箱か。(へらへらと)

松田 こっからさらに老人に？ (へらへらと)

蛭子 おう上乗せで。(へらへらと)

宮本 80とか90とか乗ってくるん。(へらへらと)

松田 本気の老人か。

蛭子 そう本気。マジ。

松田 困るなー。

蛭子 困るじゃろー？

宮本 どーせいつものあれじゃろ、

松田 あれ？

宮本 甘えーもの。

松田 え、薄いってさつき、

蛭子 ううん、濃いー、甘えーもの、毎回な。

松田、風呂敷に手をかける。

宮本 お、開ける？

松田 だって、後戻りできん感じじゃし。(開けながら)

蛭子 毎回な。

大きなお重（尺0寸ぐらいの、一段）が出てくる。

松田、蓋を取る。

松田だけ、そこから立ち上る煙を見ている。手でちょっと煙を避けて、

松田 伏せろ、

宮本・蛭子 まっつん、

松田 煙にやられる、

松田、ちよっと伏せつつ、手で煙を払う。

宮本・蛭子 まっつん…

松田、お重の中を覗きこむ。

松田 出た。

宮本・蛭子 あー…

おはぎ。すごく大きな、たくさん。あんこ一色。

松本 多いーな…

宮本 濃いーな…

蛭子 重てーな…

松田 爆弾じゃ、

宮本 へ、

松田 炭水化物爆弾。

宮本・蛭子 あー。

松田、お重を差し出す。

宮本 や、わしは。(首を振って)糖尿じゃし。

蛭子 や、わしも。(首を振って)高血圧じゃし。

松田 とか言つて食うんじゃろー？毎回。(もっと差し出す)

二人、全然手を出さない。

幹夫 おった。ここかー。

○幹夫

戸口に30代半ばぐらいの無精髭の男（幹夫）が立つ。

幹夫、草食っぽいロハス系職人のような恰好。

ポケットに手をつっこんで松田を見ている。

松田・宮本・蛭子 おー、

蛭子 神が来た。

幹夫 …オトン。

松田 おう幹夫。よしよし、おやつあげらあー、（幼児に言うようにお重を差し出す）

蛭子・宮本 おうおうおう、（とか）

幹夫 ……（無視。手を出さない）

何しよーんな、こんなところで。（感情的になることなく淡々と。以降も）

警報器が鳴りよーたんで。母屋から。

松田 え、警報器。

幹夫 俺初めて聞いたわ、あの警報の音。「空気が汚れて危険です、窓を開けて換気して

ください、空気が汚れて危険です」ってくり返し言よーた。工場こっばまでよう聞こえた。

松田 魔王か！？

幹夫 火ついてねーのにツマミ全開、

松田 あーコーヒー、コーヒーじゃ、毎朝飲みよーる、（ケロリと）

幹夫 火いつけんで今後。

松田 でも朝のコーヒー、

幹夫 ええからコンロ使わんで、今後一切。

宮本 幹夫、そんな冷とう言われなー。

幹夫 帰るで、オトン。

松田 やー、帰れんよ…。会議があるから、合唱団の。

幹夫 合唱団。老人3人で。（3人を見て冷ややかに）

松田 大事な会議じゃから、クリスマスの。

幹夫 まだ夏じゃが。

宮本 時間かけて練習がいろいろ。

幹夫 もういけんが、ここ使^つうたら。

宮本 わしらあずーっと使^つうてきたが。

蛭子 地域活動に開放いうて決ま^つとろう。

幹夫 禁止な^つたら、じきリノベーションも入るし。

松田 リノベーションいうて何^じじゃ？

幹夫 もうここは集落^{ちん}の物じゃねーんで。

宮本 鍵も持^つとるが、ほら。(鍵を懐から出して。プラプラと)

幹夫 勝手に開^けとるが、

松田 まーええがあー、母校じやろうー、俺らあーみーんな、(にににこと)

松田、言いながら幹夫と宮本の肩を組む。子供みたいに。

幹夫、さけるように事務的に払^つって離れ、冷ややかに、

幹夫 母校とか関係ねーんよ。もう町と企業が入^つとんじやから。

幹夫、初めてポケットから片手を出して、宮本に。

幹夫 …鍵。

松田 幹夫。

宮本 何でおめーに。

幹夫 渡しとく。町の実行委員^{ほう}の方に。

宮本 幹夫じゃって反対しよーたる。

幹夫 反対してもせんでも進むし、結局。

俺わかったんよ。抵抗しても、進んでいきよーんよ、町も、人も——(松田を見て)。何でも、
どんどん。

鍵。(手を出して)

宮本 ……

宮本、鍵を握る。

宮本 …ほんでも抵抗しますっっていうたら？

幹夫 まーでも、リノベ入^つたらどうせ新しく変わるし、鍵も扉も。(サラリと)

宮本、握った鍵をポケットへ。

幹夫、また手をポケットへ。

蛭子 ……あ。あそこ。シート外しよーる。防塵シート。

あの土地の方を見る。

宮本 ……ああ、

幹夫 ほらな。

幹夫、あの土地の方へふらりと歩み寄る。

幹夫 完成すんじや、いよいよ。

蛭子 魔王城のお披露目か。

幹夫 魔王いうて誰。

蛭子 町の王か、谷の民か、姿の見えんばかりでけー魔王。

幹夫 何なそれ、

蛭子 歌にあらう、お父さんお父さん言うてからー、

幹夫 何な、

蛭子 怖えがあー、魔王がおるがあー、

松田 ありやあ何、魔王の棲家か？！

宮本 テラスじやが。

松田 テラス、

宮本 テラスハウス？シェアハウス？そんなやつ、

幹夫 囁谷森のテラス。

蛭子 ふんわりした名前つけてから。

宮本 名前ばあええこと言う、何でも。

松田 さわやかじゃがー、森のテラス。

宮本 テラスいうてシルバータウンじやが。

蛭子 老人の町。

松田 町、

宮本 こんな山奥に町。

幹夫 あれは第一号棟。

松田 第何号棟まで？

幹夫 さあ、入る老人がいる限り？

松田 あれが千鶴ちゃんとの土地かー。

蛭子 あっちはな。

松田 向こうは？（マリア像の窓側）

宮本 山主が売ればの話。

松田 あれ、向こうの山主って…

幹夫 ここら一带建つんよ。向こう下った^{けんきょう}県境まで。

男4人、振り返って、マリア像の窓の方を見ている。

松田 県境まで一带林じゃが。

幹夫 林倒して、開いて、人を呼ぶんよ。他所から移住の。

松田 何でそんなん、

宮本 限界集落じゃから。

蛭子 プロジェクト。

幹夫 新しい笹越町長が打ち出した過疎地域再生プロジェクト。

松田 ほー、プロジェクトー。なんやらかっこええのうー、

宮本 来るんかのうー、他所から人なんか、

蛭子 来るもんか。囃谷で有名なんは民話だけじゃが。

隠れ里囃谷。（囃く）

松田 風が吹けば、神々の囃きが聞こえる谷。（囃く）

宮本 不老不死の落人^{おちひと}たちの隠れ住む、理想郷。（囃く）

幹夫 誰あれも知らんよ、そねーな昔話、もう今は。

蛭子、あの土地を振り返って、

蛭子 …あ、全部剥がれた、シート、こっちの面。

松田 おおー。杉張りじゃーなー、外壁^{そとかべ}。（にににこと）

宮本 骨まで丸ごと杉材じゃ。

松田 ええーのうー、総杉造りかー。（にににこと）

男4人、第一号棟を見ている。

幹夫　うちの木も入っとうろ、あん中。

松田　え、そうじゃっけ？

宮本　森林組合で集荷して、共同販売所へ卸してきた分。笹越町長が「すべて地元産の木で建てます」やら、ええ恰好いうて。

蛭子　うちの木も入っとうる。わしが焼いた炭も、乾燥剤で床下に。

いのちちんとこの木も、いのちちが削った建具も、あの森のテラスに入っとうる。

幹夫　俺が作った家具も入っとうる。

宮本　とりこまれとるのうー、——魔の手に。

蛭子　——魔境じゃ。もうここは。

老人3人、第1号棟を見ている。

松田　でも、きれいじゃなあー、やっぱり、杉目の家は。

蛭子　そらーきれいじゃなあー。

松田　ええのうー。どねーな人が住むんかのうー？　あんーなきれいな木の家ー。

にっこりと言う松田を幹夫が見ている。

幹夫　——銀の卵に住むんよ。

幹夫、突如おはぎを掴む。卵を見るように。

3人　銀の卵…？

幹夫、押し込むように食べる。

宮本　おい幹夫、（へらへらと）

蛭子　何な幹夫、（へらへらと）

松田　幹夫…？（へらへらと）

幹夫、さらにもう一方の手にもおはぎを掴んで、

幹夫 身を売った味じゃあ、(へらへらと)

幹夫、黙々と大きなおはぎを咀嚼している。手を汚しながら。

幹夫 — 甘えー…

— でもうめえー…

— たまらん…

男3人、それを見ている。

松田、おもむろに掴んで食べる。子供のように。口を汚しながら。

松田 うめえー。千鶴ちゃん。(にににと)

幹夫 — オトン。

…汚えー口。

幹夫、父を見る。

少し強い風が吹く。木々の葉が擦れ合う。また誰か数人の囁く声のするような。

(暗転表記のある最後の方の箇所以外は一切暗転なく進みたい。)

音楽や歌も最後意外は一切なく進みたい。)

○北野と細野と加奈

加奈 ここが作業棟になる予定です。

秋口。午後。

70歳ぐらいの杖をついたセレブっぽい男(北野)と、70歳ぐらいの普通っぽい男

(細野)がいる。明らかに合唱団の男たちより洗練。

30代ぐらいの女(加奈)もいる。

白ブラウスにスーツ下スカート、ユニフォーム。

加奈、ロハスっぽい深緑のSTAFF腕章を付け、首から深緑のストラップのネームカードを下げ、深緑の厚いファイルを持っている。

ネームは顔写真の横にひらがなで大きめにいのうえと書いてある。

どこかしら違和感。

細野 ああ…、ここだった…。懐かしいなあ、

加奈、中央の机に置かれたままのメトロノームを手に取り、どこか床の隅に置く。
事務的に。

細野と北野、それに目を落とす。

加奈 当初の予定より遅れてしまいましたが、間もなく工事が入りますので。

細野、最前列の机へと歩く。椅子の背に触れて、

細野 僕、ここに座ってました。チビだったから。北野くんはたしか、

細野、一番後ろの角の席を指す。

細野 あそこでしたよね。

北野 …ああ。

北野、杖をついてゆっくりと席へと歩く。片麻痺が少しあることがわかる。

細野 僕覚えてます、北野くん、いつも後で、不機嫌そうにみんなの島からちよつと離れて。ねえ？
北野 …ああ。

北野、机に腰掛ける。煩わしそうに。

加奈 私もここ出身なんですよ。最後の卒業生です。

細野 おお、そうなんですか。

加奈 2人つきりでした、生徒。

細野 僕らはたくさんいたんですよ。団塊の世代ですからね、ここにたーくさん。ねえ北野くん。

北野 ああ。

細野 まあ大半が僕らみたいに、卒業と同時に金の卵として囃谷を出ちやいましたけど。

加奈 私も早くに出て、ずっと笹越の町で仕事してきましたよ。

細野 そりゃあ若者はねえ、こんな辺境じゃねえー、

加奈、丁寧だがどこか心ここにはない話しぶり。つるつると零れるような。

北野、話の間に煙草に火をつけて、吸っている。

加奈 あの、すみません、煙草は、

北野 ……ああ。

加奈 灰皿も置いてないのです、

北野 ああ、

北野、懐から携帯灰皿を出す。そして吸う。

加奈 や、すみませんここではちよっと、木造ですし、

北野 ああ、

北野、窓へ歩き、煙草の手だけ外に伸ばして出す。

加奈 いや北野さん!?

細野 北野くん？ ほら、マリア様が煙たい、

北野 ああ悪い、これがないと、落ち着かなくて。

北野、窓の外に顔を出して、最後にとっても吸って一回煙を吐いて、

不服そうに携帯灰皿で煙草の火を消す。

加奈 や、ね、ここはこれから皆さんの作業棟として、心地よい環境にしていけるよう

わたくし私達ライフパートナーも、

北野 作業って、何。

加奈 東京での終活フェアで担当ライフパートナーがお話しませんでした？

細野 ええ、ありました、雇用の件、（加奈に、友好的に）

北野 聞いてない。

加奈 紹介動画もあったかと、

細野 ええ、大きなスクリーンで、（加奈に、友好的に）

北野 見てない。

細野 北野くん、説明会の間喫煙所ばかり行かれてませんか？

北野 ああ、行った…

細野 僕はね、このシルバー雇用が、こちらに応募した理由の大きい一つなんですよ。(加奈に)

加奈 (加奈、ファイルを開いて北野に見せ) 平日の日中はここで木工のお仕事をして頂く形に、

北野 は、…木工？

加奈 皆さんまだまだ自立されている間は、何らかの手仕事をされるのは、健康維持にも精神衛生上もとても有意義だと私共も考えまして、

北野 …木工…

北野、侮蔑的に言い、また懐から煙草を取り出して、一本、指に挟む。

スモーカーの、癖になっている流れ。

加奈 北野さん煙草、

北野 ああ、(自分の手元に気づいて) 啞えるだけだよ。

幹夫 すいません、

幹夫、戸口へ。少し息をきらせている。

幹夫、白ポロシャツにチノパンみたいな服装になっている。

加奈と同じ深緑の腕章とネームストラップを付けている。違和感。

チノは加奈のスカートと同色系。二人がユニフォームであることがわかる。

○北野と細野と加奈と幹夫、と囃谷男声合唱団

加奈 あ、ちょうど作業担当の者が、

幹夫 ああつ、どうも、松田と申します。

細野 どうもー(深々と)、これからよろしくお願いいたします、先生。

幹夫 いや先生じゃ、いちライフパートナーなんで、

北野 …木工…(怪訝。幹夫を見る)

幹夫 …え！？…えっどー？

加奈 ご心配なく。松田が一から皆さんに木工指導を致しますので、

幹夫 はい、ええ、皆さん大丈夫ですので、どうぞよろしく願います。

(小声で加奈に) あの、ちょっといいですか？

加奈　ちよっと、すみません。(北野と細野に)

加奈と幹夫、ちよっと戸外に出て、囁く。

幹夫　駄目。笹越駅で5便待って

加奈と幹夫の囁き声、全然

みたけど、

中に聞こえている。

加奈　携帯は？

細野、外が気になる。

幹夫　ずっと留守電。

北野、懐からジッポライター

加奈　親族は？(ファイルを繰る)

を取り出し、蓋を開けたり閉

幹夫　ほら、身元引受人も保証人も、

めたりしている。ゆっくりと。

(ファイルを指す。二人近い)

煙草に火をつきたい。

加奈　あーNPO法人きずな協会。

細野、北野に囁く。

んー、代行かー、困ったなあー。

幹夫　警察言うとか？

細野　何人ですかね？僕らの他に。

加奈　んー、いきなり警察かあー、

…。(無視)

幹夫　んー、なんか天気も怪しいがー、

細野　第一次先発隊。

加奈　とりあえず私さつき町の事務局の方

北野　…。(無視)

にSOS入れといた、スタッフ出し

細野　…北野くん。

て笹越周辺探してもらうように、

北野　…さあ。

幹夫　おーさすが、サンキュ、

細野、戸口へ。

(何の気なしに加奈の背に触れて)

加奈　ねーミッキー、ちよっとさー

(何の気なしに幹夫の腕に触れて)

新幹線の方まで行ってみてくれんー？

幹夫　えー遠すぎるがあー、

加奈　東京からじゃったら絶対絶対まずあっち着くがあー

細野、戸口から外をのぞいて、加奈に、

細野　あのー、他の入居者の方ですか？

幹夫　あ、えっとー、(離れて)

加奈　大丈夫ですよー、もうすぐ来られますからー、(笑み)、

宮本・蛭子・松田が歩いてくる。

3人、楽譜の束を持っている。

幹夫 あ…

合唱団3人 …

松田 どうも、こんにちは。(幹夫に、他人みたいに)

幹夫 …え…こんにちはって…

合唱団3人、戸内へ。

加奈 あの、ちょっと、

宮本 会議です。

幹夫 いやいやいや、

合唱団3人、つかつかと入って一瞬立ち止まる。北野・細野と対面する。

北野・細野 あ…。(ちよっと頭を下げる。ぎこちなく)

合唱団3人 あ…。(ちよっと頭を下げる。ぎこちなく)

合唱団3人、つかつかと各々の席に行く。

加奈、北野の手の煙草をパツと取り上げながら、合唱団に、

加奈 すみません、森のテラス入居者以外の立入りはお断りします、

合唱団3人 …。(無視。机の上に楽譜を置く。陣取るように)

合唱団3人、一瞬、机の上のメトロノームを探す。

宮本、隅の床にあるメトロノーム見つけて拾い、加奈を一瞥し、また机に置く。

いつもの通例のように。

合唱団3人、席に座る。

加奈 や、ちょっとホント、(ファイルをメトロノームの隣に置く。陣取るように)

宮本 はい、では囁谷男声合唱団、会議始めます。

向かい合った合唱団3人、ちょっと頭を下げて礼。
瞬間、加奈、メトロノームに手をかける。

加奈 あの、

宮本、ハツとメトロノームを手で押さえる。

加奈、尚もメトロノームを床へ戻そうと力をかける。

宮本、メトロノームを両手で押さえる。

宮本と加奈、ささやかに、でも強く攻防し合う。

宮本

えー、前回の会議で決定のとおり、例年通りクリスマスコンサートを開催できるよう、先日私^{わたくし}ササモールショッピングセンターへ申込み、

加奈

何ですか。(攻防し合ったまま)

宮本

何が、(攻防し合ったまま)

加奈

終わってください、合唱団は。

宮本

何で終わらにやいけんのんですか、

加奈

父と、や、…団長さんと、前に約束しました。終わるって。(力をかける)

宮本

私が新しい団長です。(力をかける)

加奈

いけんのんじやってー、もうここはー、

加奈、腕相撲のようにメトロノームに力をかける。

宮本、小さく笑い出す。

蛭子、松田も同様に笑う。ひと間笑って、

宮本

加奈ちゃん、(笑いながら)何じゃーその恰好。

蛭子

全然似合^おうとらんで。

加奈

ええんよ、(とても力をかける)

松田

へんな名札。い、の、う、え。

松田、小さな子供みたいに、ゆっくり一字一字指さして、ひらがなを読む。

松田

いのうえさん？

加奈

…

松田 何であなた方、そんな名札つけとられるんです？
迷子にならんようにですか？

松田、振り返って、幹夫の胸元を指して読む。子供みたいに。ゆっくりと。

松田 ま、っ、だ。

幹夫 ……

幹夫、ハッとネームカードを手で掴む。隠さずにはおれないような。

松田 まったださん。

幹夫 ……え。オトン…

北野と細野、ハッと松田を見る。

瞬間、加奈の懐のスマホが鳴る。キラキラとした電子音。

加奈、宮本を一瞥し、電話の着信先を見る。メトロノームの手を離して、

加奈 ……はい井上です。…あ、お疲れ様です。…ああ、いえまだこっちは…

宮本、ちよつと勝つたように加奈を見つつ、メトロノームの針の押さえを外す。

ゆっくりと振子が揺れて音が鳴る。最遅の、規則的なリズム。

加奈、ファイルを手にとって、戸口の方へ離れながら、

北野、また煙草を1本手にしている。

加奈 ……え、池？ ……池って、笹越池ですか？…はあ、何で池に…。…ですなえ、ちよつと池から歩いては無理かと…。ええはい…わかりました、じゃあすぐに。

加奈、幹夫を振り返る。

加奈、北野の煙草が目に入り、パッと取り上げて、

加奈 北野さん！煙草…！！

雨。

それとメトロノームのカウント。

○銀の卵と囃谷男声合唱団

合唱団3人と銀の卵2人が向き合っている。

松田、机に肘ついてメトロノームの針の動くのを見ている。子供みたいに、単に針の動きを楽しむような、深く何かを想うような。

細野 ……15でしたね。

宮本 70、ひくことの15は、…な—まっつん、おめ—わかるかの？

松田 え—と、50—5。

宮本 お—わかっとなるか、

松田 わかるに決まっとうう、

北野 55年ぶりか。

細野 半世紀越えてますね。

男たち おお…

蛭子 そう聞くと長え^{なげ}—な。

細野 もうすぐ三四半世紀を生きようとしてる、僕ら。

松田 さんしはんせいぎ、

細野 25年が3度巡って—

松田、メトロノームの錘を最下へ下げる。

その速さに、ハッとして、ほどなく止める。

男たち ……

蛭子 ……速っ、

宮本 ……この速さ何、

北野 ……恐ろしい速さだな。

細野 手紙—

細野、懐から白い手紙を取り出して、見せる。

細野 手紙が来たんですよ。手書きの。

宮本 銀の卵――

細野 そう、シルバーだから、

蛭子 逆金の卵計画。こつちじゃえれーニュースじゃった。

話の中で細野、封筒の中から便箋を取り出す。

宮本 その昔、金の卵として集団就職で笹越を去った団塊の世代を、今度は銀の卵として集団帰郷で地元呼び戻す計画。

蛭子 笹越町長が一斉に手紙を出して呼びかけたって。

松田、細野の手から静かに手紙を取り、見る。

読んでいるんだかないんだか。

細野 うれしかったです僕。身内も旧友もない東京のはずれのマンションで、この封筒の「囁谷」っていう手書き文字を見ただけで、何だかたまらない気持になった。

北野 手書きって、印刷だろ。誰も彼も全員同じの。

北野、懐から同じ白い手紙を出して、松田の机まで歩き、細野の封筒の横にポイと置く。

細野 でもうれしかったー。ああー僕ら、故郷から忘れられてなかったんだー、置いていかれてなかったんだーって、

松田 なあ、…誰じゃっけ？

松田、手元の2通の封筒のうち、1通を手にとって宛名を読み、

松田 細野いうて。

細野 やーやー僕です僕、

蛭子 思いっきり忘れられとるが。

松田 おられました？クラスに。

細野 こっこここ、

松田 えーおったっけ、のう、きたろう？

北野 え、

松田、もう一方の封筒を手にして、ぴらぴらと、

松田 おめーきたろうじゃろ？。

宮本・蛭子 きたろう！

松田 すげー貧乏で、ぼつれー家に住んどったきたろう、

北野 ああ、

松田 えれー嫌われとった、きたねえーきたろうとかいうて、(汚いもののようにパラリと封筒を戻して)

北野 まあ、

松田 この二人呼びよーた、(蛭子と宮本を指して)

蛭子 すまん呼びよーた、

北野 ああ呼ばれてた、

細野 そうそう呼んでました。

松田 え、え、おられました？細野さん、

細野 他人行儀！いましたってホント、

松田 すまん…何でじゃろ俺…全く思いだせん、細野さん、

宮本 実はわしも、細野さん、

蛭子 わしも、細野さん、

細野 や、距離感が！さん付け！？

北野 俺もこいつ記憶にねーなーって、

細野 ちょっと?! え、北野くん？今ですか!?

北野 終活フェアからずっと？

細野 嘘…置いていかれてました…僕…

マリア像の窓の端、傘をさした千鶴子がいる、風呂敷包みを抱きしめて。

窓の中をうかがっている。

宮本 嫌じゃのうー、この歳になったら思いだせんことばあ増えよる。

北野 ああ。まるでなかったことみたいに。

細野 …僕はよく覚えてますよ。55年前。3月。囃谷を出ていく日。

みーんな見送りに来てくれたじゃないですかー。

松田 え、細野さんを？

細野 笹越駅。就職列車。上り東京行き。ホームは人、人、人の海で、笹越のいろんな村から出てく金の卵だらけで。

僕や、北野くんや、囁谷中の就職組全員同じ車両に固まって座って、窓からこう顔出して、みんなホームからこう手伸ばして、

松田 おー、そうじゃー。(細野に小さく手を振って)

就職おめでとう。行ってらっしゃいー細野さん、(今戸口から出そうと)

細野 や、松田くん、今じゃなくて…

蛭子 ちゅーかあん時わしらあが見送ったんは、沢田さんじゃろ？

宮本 …沢田さん、

松田 あー、沢田あゆみさん！

蛭子 そ、すげー美人で清らかじゃった、

細野 そこは覚えてるんだ、

松田 しかも巨乳、

蛭子 そそそ、

松田 俺らのマリア様、沢田さん。

細野 え、沢田さんだけ?!あの見送り、

蛭子 どうー考えても主に沢田さん目当てじゃったろー、男子は全員、

宮本 おうー、女子は全員毛利目当てじゃってー、

松田 あー毛利、毛利宗男!やたら彫深ふけえー男前の、

細野 毛利くん僕の隣に座ってました、就職列車、

蛭子 女子みんな毛利に土産やら手紙やら渡しよーたがー、

宮本 千鶴ちゃんなんかえつれーでつけーの渡しよーたが、風呂敷に包んで。(笑って)

蛭子 そそそ、たぶん中重箱。(笑って)

宮本 絶対ぜったいそうー、(笑って)

蛭子 京子ちゃんも手紙渡しよーたろ、

宮本 ああ…、ほんでみーんな手を振って、毛利と沢田さんに。

細野 そんな…、僕らだってもらいましたよ、いろいろ。ねえ北野くん?

走り出した就職列車の中で、誰もがこっそり涙を拭いて。ねえ、北野くんー?

北野 さあ…、どうだったか、

細野 あれもなかったことですか。

北野 やあ…、なかったような、なくしたような。

細野 何だったんですかね、あれは。あの光景は。

全一員同じような一張羅着て、万歳ーとか言われて送り出されて、

15の時から故郷を離れて、都会ですーっと働いて、歳取って、知らないよ、そんな貧しい話。もう今誰も。

北野 知らないよ、そんな貧しい話。もう今誰も。

細野 何なんですか、この温度差。

北野 昔々ある田舎に、そんな時代があったってだけ。

細野 時代の一言で終わりですか。僕らの青春すべてを捧げたのに！

北野 青ー春ー、

北野、嘲笑的に言い、ヘラヘラと、後の自分の席から前の方へと歩く。杖。さつきより強まっている雨脚。

細野 北野くん、

北野 知ってる？毛利。

俺就職先同じ工場だったんだよ。大日本金属。寮の部屋も同んなじで。

アイツ、2か月足らずですぐ辞めたよ。朝起きたら、逃げていなくなってる。

で、そこからずーっと会うことなかったんだけど。つい最近、当時の同期の奴から聞いたんだ

よ。…毛利、孤独死だった。

細野 …え。

松田 …孤独。

北野 去年、大久保のアパートで。(ヘラヘラと) 何やってたんだろね、毛利、69まで大久保で。

あんーなに土産とか手紙もらってた、男前の毛利がさー、

孤独死だって、意味わかんねー。(ヘラヘラと)

北野、細野の目の前の机に杖を振り下ろす。激しく。木を打つ音。

細野 北野くん…

北野 アイツここ。

北野、吐き捨てるように言って、戸外へ。

松田 どけー行くん、きたろう。

北野 煙草。(1本出して指に挟んで)

宮本 外。雨。

北野 平気。壁際。

北野、戸外へ出る。

細野、毛利の机に触れる。静かに。

北野が壁際をマリア様側に曲がったそこに、千鶴子がいる。

○千鶴子と北野

千鶴子、北野を見つめている。

北野 …え。

千鶴子 …北野くん。

北野 …あ、はい、

蛭子 千鶴ちゃん？

細野、窓から外を見る。合唱団3人も。

千鶴子、頬骨あたりに痛々しいガーゼが貼ってある。

宮本 どしたんな…

千鶴子、北野に傘をさしかける。

北野 …泉？ …何。

千鶴子 うち、渡しとらんよ。

北野 え？

千鶴子 絶対、毛利くんには、うち、渡しとらんよ。

勝手なこと言わんで！！

風呂敷も重箱も何も渡さん！！

千鶴子、窓から男たちに。

蛭子・宮本 ご、ごめん…。

北野 …ああ。…うん。どうも、あん時は。…うまかったよ、お弁当。

千鶴子 …うん。…いいえ、…どういたしまして。

蛭子 え、(囁く)

宮本 え、(囁く)

細野 え、(囁く)

松田 え、(囁く)

千鶴子 見よーたよ、北野くん、うち、新聞やら雑誌やら。

北野 ああ、そうなん、泉、

千鶴子 すげえーがー。でっけー会社作ったんじゃねえー。お金持ちになつてー

北野 やあ、もうあれは、息子が、

千鶴子 ああ、そうじゃねー、ごめん、

北野 や別に。バラバラだよ。もう全一部壊れて、

千鶴子 あ、これ。

千鶴子、風呂敷包みを北野に差し出す。

北野 ああ、

千鶴子 食べて、みんなで。

変わり映えせんものじゃけど、あれからずーっとうちは。

…はい。(差し出す)

北野 …。

北野、煙草をしまう。

が、風呂敷包みを取らず、千鶴子の傘を取る。

千鶴子 え…

北野、傘を差し、千鶴子の中に入れて、戸口へ。ゆっくりと。

千鶴子 え、え、北野くん、

北野 なー、(戸内の男たちへ)

北野、戸口で傘を畳み、戸内へ。

北野 なんかさー、泉が、これー、(男たちに)

千鶴子 や…！

千鶴子、北野を振り切って行こうとするが、

北野 入れよ。

千鶴子 うちなあ、いけんのんよ。

北野 何がいけんのん、

千鶴子 何ーんでも売ってしまう泉商店の千鶴子じゃからいけんのん、

北野 え？

千鶴子 裏切つとるん、ここみんなを、

北野 へ、

千鶴子 ようーけお金もろうたん。どこの家うちよりも真っ先に。

うちもうー正ー直面倒くせかったん。夫婦養子じゃし年寄じゃし、

一番ひれ広え林、手に余つとったん。

売ったお金、息子夫婦が家建てるんに足してやれたらー思つて、パーツとうち。
もうーそつから他の山主もなし崩しよ。

千鶴子、周囲の林を指して、

千鶴子 ほら、あそこ、2号棟。あっち3号棟。向こう4号棟建設予定地、

その先は、その先は…

松田 千鶴ちゃん、どしたんなほつぺた、

千鶴子 (隠すように押さえて。) 罰当たったん。囁谷マリア様見よーた。

宮本 な…、エビちゃん、おめー…

蛭子 …は、知らんよ、

千鶴子 違うんよ、転んだん、うち。

宮本 どこで、

千鶴子 店。

北野 嘘。

宮本、蛭子を見る。

蛭子 ホンマ知らんて、わし、

松田 まし、席、座られえー、千鶴ちゃん。

松田、千鶴子の風呂敷包みを取って、

松田 あれ？ …どこじゃっけ？ 千鶴ちゃんの席。

北野 そこ。(指す。前の細野の近くの席)

松田 な。

松田、風呂敷包みを千鶴子の席に置く。

千鶴子、話の中でそろりそろりと席へ。

細野 覚えてますよ僕。泉さん、ここからいつもみんなのこと見てましたよね。休み時間も、

いつも、泉さん、そっと黙って。

千鶴子 細野くん、

細野 ああ、僕のこと、

千鶴子 見よーたよ、いつもノートに詩ー書いてた細野くん。

千鶴子、席に座る。

宮本 はい、では女子マネージャーと新入団員2名も入ってくれたということで、囃谷男声合唱団、練習始めます。

団員3人、新団員3人に礼。

北野・細野・千鶴子 …は？

北野 合唱団？

宮本 (静かに) もう時間がないです。クリスマスコンサートまで。

じきに秋が深まって終わります。森の冬は早いです。

北野 コンサートって、

宮本 囃谷で暮らす男らあは、ずっと歌ってきました。

森林組合の傍ら、山作業の合間を縫って寄り合って。

千鶴子 小さく、細々と、ずっと…

蛭子 住むんじやろ、おめーら。これからまた、囃谷に。

北野 — ああ。

細野 — はい。

宮本 では、脚を肩幅に広げて立って——（静かに。以降も）

松田と蛭子、立つ。

北野と細野もならって立つ。

宮本 これが、基本姿勢です。（ゆっくりと）

首筋を伸ばして。（男たち、伸ばす）

胸を張って。（男たち、張る）

力を抜いて。（男たち、抜く）

誇りを持って——（男たち、持つ）

重心はやや前方に。いつでも1歩前へ歩いて行ける状態で——

千鶴子、立つ男たちを見ている。自分の席に座って。

雨はさらに強まっている。

と、戸口へ、70歳にはちょっと見えないずぶ濡れの女（沢田）が、

○沢田

沢田 ……

沢田、雨に濡れたまま、戸口に立ち尽くしている。

息をのんで。中の男たちを見ている。

美しい。清らかとはいえない。

男たち ……

男たち、基本姿勢のまま、立ち尽くしている。

息をのんで。沢田を見ている。

雨。沈黙。

遠雷1つ。

沢田、そろりと1歩前へ。戸の中。

男たち、ゆらりと1歩前へ。戸の方。
千鶴子、それらを見ている。座った席から冷ややかに。

沢田 迷っちゃった。

沢田、小さく笑って言い、息をほどく。呼吸。

男たち ……沢田さん。

沢田 ただいま。

沢田、小さく言って、そろそろともう少し中へ。

男たち ……ああつ、

男たち、各々の懐かどこかから、ハンカチやらタオルやらを沢田に差し出す。

沢田 え？（ちよっと小さく受ける）フッフ、…手品みたい。

男たち、手を差しのべている。

沢田 ごめん、ありがとう。

沢田、一番先頭にいた細野に言うが、宮本のハンカチを手取る。繋ぐように。

宮本 ……あ、（なんか隠そうとして隠しきれない反応）

男たち ……あー…（なんか隠そうとして隠しきれない逆の反応。ハンカチを懐へ）

遠雷。

沢田、宮本のハンカチで髪や頬や身体をずっと拭きながら、

宮本 ……沢田さん、…荷物は？

沢田 落としちゃった。

宮本 落としたいうてどけー、

沢田 池。

宮本 ……笹越池。

沢田 そう。(すごく近くへ寄ってじーっと顔を見て) ……宮本くん。

宮本 ……うん、…何で、

沢田 何でってえっとー…、私、緑内障で、目がとーっても悪くって。

でー、落としちゃった、池中。嫌あね。

宮本 や、何で笹越池なんか行ったん…

沢田 んー…？ だからー、迷っちゃって。

松田 沢田さん、歩いてきたん？この雨ん中。

沢田 そう、(すごく近くへ寄ってじーっと顔を見て) 松田くん。

松田 おー、遠かったろ。

沢田 遠かったア。世界の果てみたいに。

細野 探されてましたよ、ライフパートナーの方たち、

沢田 だろうなーって、(すごく近くへ寄ってじーっと顔を見て) 細野くん。

細野 ええ、携帯つながらないって。

沢田 私、わかんなくなっちゃった。——元に戻るの。

沢田、懐からスマホを出して、手で撫でながら、

沢田 新幹線で、音が出ないようにしたくて触ってたら、駄目んなっちゃった。

もう震えないの。何んーにも知らせてくれないの。

(すごく近くへ寄ってじーっと顔を見て) 北野くん。

北野 ああ、

沢田 戻せる？ 元に。

沢田、スマホを手渡す。

北野、スマホを受け取って何かしようとする。

千鶴子の形相。

北野 ごめん…ちょっと俺、無理っぽい、

蛭子 電源長押し、サイレントからサウンドにタップ。

蛭子、北野からスマホを取って、手早くして、

蛭子 はい。(沢田に渡す)

沢田 すごい、(すごく近くへ寄ってじーっと顔を見て) 蛭子くん。

蛭子 おう、全然。

沢田 ありがとうー、みんな。——戻った。——これで元通り。

沢田、男たちに言っ、スマホを懐へ戻す。

雷。ちよつと近い。

沢田、中央の自分の席へと歩く。

千鶴子 何で戻ったん。…あゆみ。

沢田 (寄らずに顔を見て) 千鶴ー、

戻って来ようか、迷ったんだけど、

千鶴子 聞いとったよ、うち、いっぺえー噂。

沢田 噂って、

沢田、話の間中、宮本のハンカチを何の気なしに手で弄んだり広げたり拭いたりしながら、

千鶴子 あゆみ、東京ででえーれー暮らししよーるって。

沢田 でえーれー暮らし?! そうねー、

千鶴子 でえーれー人と、早ーうに結婚したーいうて、

沢田 でえーれー人なんて、(少し笑って)

千鶴子 就職先の縫製工場から、でえーれー玉の輿じゃって、

沢田 してない。私、ずーっと独身。生涯未婚よ。(少し笑って男たちに)

千鶴子 上手じゃねエー、やっぱりさすが。

沢田 何それ、

千鶴子 囁谷のみんなーな思よーたんよ。

あゆみは特別じゃって。

沢田 何が特別、

千鶴子 何か、こねーな所で終わるはずねえー人じゃって。

沢田 終わるんよ。ここで、普通に。

千鶴子 終われまー、普通には。あの家じゃあー。(1号棟を指して、軽蔑的に)

沢田 ええねエー——千鶴は——。

千鶴子 どこがア、

沢田 ずっ——と思つてたの私。この先どこで終わったらいんだろ——って。

探してたんだア、この先死ぬ場所。東京で一人は嫌だし、知らないところで知らない人とも嫌だし。そんで——、戻つたの。やっぱり、嘯谷へ。

千鶴子 ホンっまうち、心の底から失敗じやったア——。あそこを魔王に売つたこと。

近雷。

千鶴子、頬のガーゼにぎゅっと手を当てながら言う。

沢田 ありがとう——千鶴——、

落雷。真近くではないがそう遠くない林。

びくりと身を縮める沢田と千鶴子。

沢田は宮本を、千鶴子は北野を、そろりと見る。

宮本と沢田、北野と千鶴子、各々見つめ合う一瞬の沈黙。気まずい。

松田・蛭子・細野、抜け出るように窓の外を見る。

沢田、宮本のハンカチを口に当てながら、

沢田 落ちた……(宮本を見て)

宮本 あっちの方、(沢田を見て)

沢田 木が裂けた、音。

千鶴子 ね、煙は？(北野を見て)

北野 さあ——、(千鶴子を見て)

細野 見えませんね、煙、

蛭子 いのちちんとこの林の方かの、けんきょう県境の、

宮本 あっここにはでっけ——千年杉が植わつとる。

千鶴子 千年杉、過去に何度も雷の落ちた跡のある、

松田 おー、魔王が暴れよーる。(遠く高く指さして)

松田だけ、そこに魔王を見ている。

松田 お父さんお父さん、聞こえんかの——魔王が何か言うところう——

雷、少し離れる。

沢田 平気？（宮本を見て）

宮本 平気。じゃと思う。（沢田を見て）

沢田 そう、昔々、うちの父親もこんなふう^にに気にしてた。

山火事は怖えーって。囁谷の山子^{やまこ}の生活全てを、一瞬でうしなう。

千鶴子 平気よ。そうそう、雷じゃあ。

一番怖えーんは、人の不始末じゃろう。…人の、消え残った火種の。

沢田 …そうね。（宮本のハンカチを口に当てたまま）

松田 のうー、早うー続けようで、宮くん。

宮本 へ、

松田 女子マネージャー二人もきてくれたがあ。

宮本 ああ、

松田 基本姿勢の続きじゃろう？ いつでも1歩前へ歩いて行ける状態で立つて、

細野 その次は、団長、

宮本 次は呼吸法です。

沢田 何あに、それ。（少し笑って）

宮本 合唱。

沢田 誰が歌うの？

宮本 ここの男みんな。

沢田 私、歌大ー好き。

遠雷。

男たち、その沢田の声をきいて、足を少し開き、また基本姿勢で立つ。

沢田 たーくさん聞いた。男の人の歌う声。私、毎晩、東京で。

並んで立つ男たちと沢田、向き合う。

千鶴子、机に肘ついて見る。その形相。

宮本 では、呼吸練習です。

呼吸を、コントロールすることが大切です。

(人差し指を立てて口元に) キャンドルの炎が消えないぐらいに。
深く息を吸って、少しずつ、フーッと息を吐き出します。

一定の速度で、ゆっくりと、乱れないように、細く、長く。せえーの、

男たち、人差し指を口元に立て、深く息を吸って、細くフーッと吐き始め
た。と、沢田の懐の電話が鳴る。

沢田 あ、ごめん、

沢田、懐のスマホを出して、着信先を見る。とても目の近くで。出ない。

沢田 あ、いい、

電話、鳴ったまま。沢田、宮本のハンカチで包んで握って、

沢田 続けて。

宮本 でも電話、

沢田 知らない番号。

細野 ライフパートナーの方からじゃ、

沢田 どこ押すの？ 出方、わかんない。(少し笑って)

男たち …。

沢田、鳴るスマホを押さえ込むように胸元に。暫く。

電話、切れる。

沢田、ハンカチごとスマホを懐に入れて、

沢田 どうぞ。ねえ、続けて。(人差し指を口元に立てて) 呼吸を。せえーの、

男たち、人差し指を口元に立てて、深く吸い込む。

吐こうとすると、窓外で喘ぎ声。密やかな。

幹夫・加奈 ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、

○幹夫と加奈

幹夫 駄目、

加奈 動かすんよ、どうにかして、

仲秋。宵。薄暗い。

幹夫と加奈、二人でマリア像を抱いている。

加奈も幹夫と同じチノパンのユニフォームである。

が、二人とも腕章も名札も外して。二人の囁き。淡々と始まる。

幹夫 真剣罰当たるって、加奈、

加奈 ええじゃろう？こっからこっちはミッキーとこの林なんじゃから、

幹夫 じゃけど、

加奈 運ぶんよ、うちの林まで。(落雷の林の方を見る)

幹夫 あねーなとこまで絶対無理、

加奈 元々誰かが運んできたんじゃから、この坂を。

幹夫 大昔っからこけーあるんで。囁谷は最初、隠れキリシタンたちの潜んだ聖地じゃったって、

加奈 …聖地やら、うち知らん。

明日っから変わるんよ。ここは予定通り、作業棟になるん。

幹夫 どうもできんが。あねーずっと反対しよーんのに、入居者まで、

加奈 じゃから、

幹夫 事務局も要求飲んで工事止めとるが。

加奈 マリア様がこけーおるからいけんのんよ。(マリア像の腕を掴んで) 守っとられるやら皆言つてから、

幹夫 何でこねーな事すん、加奈ー、

幹夫、加奈の手を掴んではがす。

加奈 放っておかれんがぁー……！

あれからひと月。…知っとるじゃろう？ミッキーも。ここで、銀の卵が何しよーるか。

加奈、窓に張り付いて、中を覗く。

幹夫も、中を想像して覗き、

幹夫 何もしょーらんよ。

加奈 何言よーん、

幹夫 合唱しよーるだけじゃろ、

加奈 だけじゃあとどまらんよ、混声合唱じゃ。

幹夫 はあ？混声？

加奈 うち、町のホームで働きよーた頃、痛えー目合うとる。

「こっから甘う見よーたらどねーな泥沼ハマるか。ぐつつちやぐちやなるんよ。
夜這いやら三角関係やら普通にもうぐつつちやぐちや、

幹夫 ちよ、連発せんで、頼むから。(へらへらと)

加奈 だってホンマぐつつちやぐちやに、(へらへらと)

幹夫 大丈夫じゃろ、一号棟はまだほら、みんな自立が条件なんじゃから。
そんなぐつつちやぐちやまでは、

加奈 自立からどけー訪れるか、ぐつつちやぐちやのまま行きつく先ねえーんで。

底なし沼じゃ。老人の、愛欲の、

幹夫 張り合いじゃろ？ちよっとした。ええがー、老人にもそんなくらいの快樂与えちやろうなあー、

加奈 何なん男は！

幹夫 男とか今、(へらへらと)

加奈 与えた気にならんで。快樂なんかじゃねーんよ。：絶望。

幹夫 絶望ってー、(へらへらと)

加奈 いけんよ。仕事。ちゃんと作業棟にして、木工させて、

幹夫 機械じゃねーんで。人間で。

加奈 じゃから、動物になる前に。

幹夫 動物、

加奈 手つかずの森の、野放しの動物。

さ、もう一回。お願い。

加奈、そろりとマリア像に抱きつくように手を回して、

幹夫 絶対バレるが、誰がしたか、

加奈 知らん知らんで通すん。(そのままの体勢で。以後も)

幹夫 通らまー。

加奈 ほら、こないだ夜中、1号棟の窓じゃって割られたが。

前に泉商店もやられたし、

幹夫 じゃから何、

加奈 知らん誰かの仕業になるよ、反対派の。

幹夫 えげつねーこと思いつくのう、

加奈 あ、じゃあ不思議よ。そうじゃわ、不思議が起こるんよ。ほら、神の現象。

幹夫 何なそれ。

加奈 …歩いていくんよ、マリア様は。この夜のうちに、自分の足で。ここからあの千年杉のたもとまで歩くん。

加奈、マリア像を抱いたまま、幹夫に手を伸ばす。

加奈 …さあ、行こう。巡礼よ。

幹夫、ゆっくりと手を伸ばして、加奈の向い側からマリア像をふたたび抱く。二人の腕はゆっくりと交差して。

と、加奈の懐からスマホのアラームが鳴る。

加奈 あ、もう9時じゃ、

幹夫 笹越にお迎え行かないけんのんじゃねーん。ゆうたくん、夜間保育。

加奈 延長しとる、勇太、24時間託児。

幹夫 ええん、それで、

加奈 …いいよ。…今夜は。

幹夫 まだ2歳じゃろ、

加奈 他頼る先ねーし。仕事、仕事せにやあ私。せえーの、

二人、渾身でマリア像を抱き上げる。(全然上がらない)アラームは止む。

二人 ………………、

昇りつめるような喘ぎ声。古い枷を引きちぎるように。

マリアの重い身体が、少し振り返ってこちらを向く。

二人 あ、

二人、ハッと下を見る。

小さい風が吹く。木々の葉が小さく擦れ合うと、誰か数人の囁く声のするような。

松田、人目を忍んで静かに歩いて来る。

○松田と沢田

夜明け。

松田、マリア像を見つめて、口早に囁く。

松田　マリア様マリア様、囁谷マリア様、お助けください。今朝、目ざめた時、俺は、ベッドの上で、自分が一人のしぼんだ老人に変身しようとするのに気づきました――

沢田、教室に入って来ている。

松田　…ね。

松田、ちょっと両手を開いて、マリア像に見せる。

沢田　…そうね。(囁く。以降も)

松田　マリア様、教えてください。どうしたら俺は、元へ戻れるんでしょうか？

松田、マリア像へ手を伸ばす。

沢田　あ、

松田　え、

沢田　やだ。

松田　え、え、

沢田　今触ったでしょう。

松田　誰、(振り返って)

沢田　私。

沢田、窓の外の松田を見る。窓までの距離はまあまある。

松田 ……マリア様。
沢田 フッフ、何。

松田、窓際へ歩み寄る。

松田 見よーられたんですか、俺を。

沢田 見た。宮本くん。

松田 ……松田です、

沢田 松田くん。(コロリと)

松田 マリア様…？

沢田 やだ私、ホント目がもう、緑内障で。でも見た。松田くん、中学ん時も触ったでしょう、マリア様の胸。

松田 え、中学？

沢田 まだ他の誰あれも登校してきてないこんな朝。そこで一人、手ー伸ばして。

松田 そうですか、もう遠ーい昔、

沢田 触ったでしょう、左のおっぱい。

松田 すいません。(頭を下げる)

沢田 私に謝られても、今。(少し笑って)

松田 忘れてしまった、感触。

沢田 え、感触、

松田 まだ本物触ったことなかった、少年の昔、触ってみてかった。どんななのか。

沢田 フッフ、嫌あね。

松田 今でも何度も触ってみてえーんですけど、もう全然思い出せん感触。

松田、窓越しに手を伸ばす。沢田の左胸の方へ。

沢田 え、

松田 心臓、

沢田 え、

松田 マリア様、あなたの心臓を触ってみてかったんですよ、左のおっぱいのその下の。

沢田、ゆっくりと歩み寄る。ぎりぎり手の届かない所で立ち止まる。

松田 サンタマリア様、（沢田の顔をまぶしげに見て）

沢田 何よそれ、（少し笑って）

松田 届かんです。ぎりぎり。

沢田 惜しい。あとちょっと。

松田 不思議ですね、マリア様……。あなたはずーっと若えまんまで、永遠に歳とらんですか？
心臓は早回らんですか？これは何かの魔法なんですか？

沢田、左胸の前の松田の手を見て、

沢田 魔法があるといいのよね、松田くん。

二人、魔法の効くかもしれないあとわずかの悲しい距離を見ている。間。

松田 あ、そうじゃ、

松田、ポケットから硬貨を取り出して沢田に差し出す。

松田 はい、

沢田 何それ？（目が悪くて見えない）

松田 100円。マリア様。

沢田 ……松田くん……

松田 知つとるよ。クラスの奴らはこれで魔法を、

沢田 知らない、100円なんかもう知らない。忘れて！

松田 泉商店で鉛筆1本5円じゃからー、20本も買えるよなー、

沢田 鉛筆20本なんか知らない、しまつて！ お願い。

松田 ……そうですか。

松田、100円をポケットへしまう。

沢田、あとわずかの距離、前へ。

沢田 ……いいよ、ただで、もう全然。触つて。

松田 ……

松田、沢田の左胸に手を伸ばす、が、ぎりぎりまでピタリと止めて、

松田 いいです、ただなら。魔法は。

沢田 つまんない。

松田 きっと何の感触もねー。心臓の。

沢田 ……バレちゃった…

沢田、もっと窓のぎりぎりへ寄って、松田越しにマリア像を見る。

沢田 マリア様マリア様、囁谷マリア様！

松田 なあ、前よりこっち向かれとる。(沢田に背を向けてマリア様を見て、ヘラヘラと)

沢田 私も救いを求めにきたんです。中学のあの朝もこうやって！

松田 ほら、振り返って見よーられる。

沢田 初めて悪いことをした夜。朝早く目が覚めて、たまたなくて、どうか貧しい私を許してくださいって。

松田 俺も同じです。もう毎朝早うーに目が覚めます。しょんべん漏らして、罪深えー行いばあして。

沢田 何ーんにも信じないのに。今も、私。

松田 どうか、(指を組んで)

沢田 どうか、(指を組んで)

二人、窓越しに前後にいて、マリア様に懺悔する。

憔悴ぎみの幹夫、戸口へ。

幹夫 おった。

松田 あれ…

幹夫、中へ入ってくる。

幹夫 何でこんな夜明けにここに、

沢田 ん？ えっとー、朝練。

幹夫 何の？！

沢田 合唱。

幹夫 戻りましょう、1号棟へ。

指した幹夫の人差指を、沢田スツと握る。

沢田 ……はい。

幹夫 ……はい。

沢田 ……わかりました。

幹夫 ……あの、手、

沢田 ……一緒に。

幹夫 ……ああ、はい…

幹夫、沢田の手を引いて、戸口へ。

沢田、松田を振り返って、見る。

松田 何ですか、あなた、

幹夫 ……や、

松田 マリア様をどけー連れていくんじや?!

沢田、幹夫を見る。

幹夫、窓ごしに松田に、

幹夫 ……帰ろう。そこまで一緒に。

幹夫、沢田の手をひいて、マリア像の方へ。

幹夫 早う行くで、

松田、行きかけて、

松田 あ、折れとる…!

松田、下を見て、

幹夫 …何な。

松田 蛇。マリア像の足元の蛇。

幹夫と沢田、マリア像の足元へ向かう。

幹夫 …。(知ってる)

沢田 あったつけ、足元に蛇なんか。

松田 あったがずつと、昔っから。

幹夫 何じゃあ、気味悪い、(沢田の手を離す)

松田 世界中のどこでも、こねーなふうに両手を広げた無原罪のマリア様は、微笑みながら、足元では蛇を踏みつけとられる。

沢田 本当ね、踏んでる。

松田 アダムとイブを誘惑した悪魔サタンの使いの蛇が、二度と悪さをせんように。

沢田 砕けてる。胴体が真っ二つ。

松田 悪いことが起きらあー。

沢田 不思議ねー。

松田 何でじゃろうー、(幹夫に)

幹夫 …帰ろ、

幹夫、松田の手を引く。

松田 人さらい。(幹夫につぶやく)

幹夫 ……

幹夫、それでも手を引く。強く。

沢田の懐のスマホがまた鳴る。

松田 マリア様、逃げる。

松田、沢田に言う。

沢田、懐の着信音をぎゅっと押さえて取り残される。

幹夫に手をひかれてゆく松田と入れ替わりに千鶴子、そろりと教室に入って来る。

まるで見ていたかのよう。

合唱団の男たちの声。各々の高さ低さで。(歌わない。声を伸ばすだけ)

男たち あー アー—— あ——

着信は止んでいる。声の中、沢田も教室へ。

○合唱団、パート分け

晩秋。午後。

合唱団メンバーが教室にいる。松田は不在。平然と進む。

宮本 ハイいいです。

宮本、順にポンと肩を叩いて、

宮本 じゃ、第1テノール(細野)、第2テノール(自分)リードね、そしてーバリトン(蛭子)、
バス(北野)ですな。

北野 え、今でもうパート決定？

宮本 はい決定です。

沢田・千鶴子、拍手。が、すぐに、

蛭子・北野・細野 いやいやいや、

細野 納得いきません、

北野 もう1回やろうぜ、

蛭子・細野 おうー、

宮本 いやいやいや、

千鶴子 もう何べんもやったがー、(頬のガーゼは大判のテープ状などのライトな素材のものに変わっ
ている)

北野 俺一番下なんかやだよ。(煙草を1本取り出して)

宮本 パートの上下は身分じゃねーから、

北野 嘘嘘、

宮本 声域ですから。

細野 ならちやーんと声域聴いて分けてくださいよ。(低)

宮本 無理やり下げとるが、今、

細野 そんなことないですよ。(低)

北野 さ団長、もう一回声域をね、(高)

蛭子 そ、公平にね、(高)

宮本 や上げてきとるが、

北野 上げてねーよ、地声。(高)

宮本 煙草片手に何言よーん、

北野 美声だから、元々俺。(高)

宮本 不自然です、全員ホント。

沢田 ねーえ、どうしたいの？みんな。

北野・蛭子・細野 そりゃあー(沢田の元へ寄って)

北野 どうしたいって、なあー？

蛭子・細野 おうー

千鶴子 言えば？やりてえパート、

沢田 そうよ、希望、

宮本 言ってみろよ。(挑戦的)

細野 第2テノール(挙手)、

蛭子 セカンドテナー(挙手)、

北野 リードボーカル(挙手)、

宮本 全員同じじゃが！ リード、同じパート、

沢田 そっかあー、リードしたいわけなんだー、みんな。

北野・蛭子・細野 いやあー(沢田の元で)

宮本 持って生まれた声ですから。ね、どのパートも比重は同じ。

千鶴子 さっきって、リード誰に決まったっけ？

宮本、挙手。

沢田、宮本の少し近くへ寄ってじーっと顔を見て、小さく、

沢田 …宮本くん。…ずるい。

北野・蛭子・細野 ……。(羨)

北野 おいおいおい、

細野 僕も言われたい、

蛭子 なんか割増しで腹立つ、宮くん。

宮本 何で？

蛭子 歌イマイチなくせに。

宮本 え、

千鶴子 正直蛭子くんのがうめーよね、

沢田 そうねー、

宮本 え、え、

細野 そもそもなんで宮本くんに決定権が？

宮本 団長ですから？

蛭子 音楽センスねーくせに、

宮本 采配力ですから、パート分けは。

蛭子 おかしいが。いのっち団長の間、わしずーっと第一テノールじゃったのに、トップテナーからバリトンに格下げって、

宮本 格下げとかねーし。高音から低音パートへの移動を身分の格下げと受け取る方がおかしいです。卑屈です。

蛭子 何なそれ、

宮本 高い低い言うから、おめーが、

蛭子 …どこまで行っても管理者気取りか、おめー、

宮本 …何が不満なん、ずーとあなた、(へらへらと)

沢田 宮本くん、

蛭子 そりゃーあなた、囃谷生産森林組合の？元職員兼代表理事組合長様じゃけえなあー？

宮本 じゃけ何い、

蛭子 わしやー労働者側じゃし、決められた割り当てに従えーいうことか、

沢田 蛭子くん、

宮本 は？単にパート区分ですから。ね、落ち着いてくださいよ、(蛭子の方をポンと叩いて)
副団長ー、

蛭子 ……おめー…

宮本 ……おめー… (とても嫌な空気)

沢田 やだあ、やめてー二人！

千鶴子 何なあゆみ！

沢田 何で私？！

千鶴子 かき乱さんで、

沢田 乱してない、

なんか一触即発。

細野 (挙手) あ、やっぱいいですいいです、もう僕、決まったパートに従いたいです。

北野 (煙草で挙手) じゃいいよ俺も、最下層で。面倒くせー。

宮本 じゃって? ほないいが、リードすりゃあー、副団長ー。

蛭子 はあ!?

宮本 思い通り行きゃあー、千鶴ちゃんとかやらー号棟への嫌がらせもやまるじゃろうー?
ー?

蛭子 はあー!? (襟首を掴む) 知らんて、

千鶴子 もうええってー、

細野 (挙手) 団長、副団長、パート練習がしたいです。

北野 さー歌お、一番下。バス。バス。(低。煙草を指揮棒のように上げて)

沢田 ね、松田くんはどうすんの? パート。

宮本 まっつんはだって、

蛭子 切り捨てか!!!

蛭子、宮本の襟首を突き放す。もう片手は頬を張るような感じで。

眼鏡が飛んで落ちる。

宮本 やっぱり……、乱暴じゃのう、(囁く)

蛭子 やっぱりて何……、どっちが乱暴なん、(囁く)

沢田、宮本の眼鏡を拾おうと床を探す。うろつろと。

宮本 だって…まっつんはここんとか来んし、合唱いうてももう…!

指揮者はどうじゃろ、最悪本番だけでもできよう!?

蛭子 だって…アイツはずーっとバリトンじゃが! わしよう変われんわ、パート。

沢田、宮本に眼鏡を渡す。

沢田 …はい、

宮本 …ああ、（眼鏡をかける）

松田がいる。

枝打ち用の鉋を持っている。

無防備に、普段着で。腰にだけ道具ベルトと数本の道具を下げている。

宮本・蛭子 まっつん…

○松田

松田 おうー、おつかれー！

全員 ……

全員、鉋を見ている。

宮本 何な、そのカッコ、

松田 おめーらこそ道具は？

蛭子 道具って何すん。

松田 枝打ちじゃが。さ、行くで。

宮本 何い、合唱じゃが、まっつん。

松田 合唱はおめー、全員山仕事終えてからに決まっとうー、

蛭子 終わったが、山はもう、

松田 みんななサボってしもうてから。

こねーにどこの林も上木の茂ったまま放つといて。

松田、鉋で頭上を指す。

松田だけ、そこに杉の上木を見ている。

松田 上の枝を払って、光を入れちゃらなあー。下の木が育たん。山が死ぬ。

松田、鉋を構えて椅子に一段上る。

全員 おおっ、（など）声が出て、寄る（

千鶴子 危ない、明くん、

松田 千鶴ちゃんこそ危ねーが。どいとかれえー。落ちるで、打った枝が。逆のほっぺもケガするで。

ドキリとする千鶴子。

松田にだけ見えている枝に、鉈を振り上げる。

全員 ああっ、(など声が出て)

幹夫 オトン、(冷静に)

幹夫と加奈が戸口へ。

松田 また来たか。……蛇め。

松田、幹夫に鉈を向ける。静かに。

加奈 やっ、

松田 魔王の使いめ。

幹夫 もうええから。…鉈。(淡々と手を出す)

松田 邪魔ばあしよって。

幹夫 待ちよーるから。2号棟でみんな。はい、鉈。

幹夫、手を出したまま、鉈のすぐ傍へ。

松田、鉈を向けたまま、

蛭子 ……今何て。幹夫。

幹夫 何が、

蛭子 2号棟？

幹夫 うん、今朝から。

全員 え、(とか)

幹夫 よう出歩くから。

宮本 おめー、

蛭子 おめー……！……

幹夫 何な、ええんで、全然家よりあつちのが。(淡々と。以降も)
加奈 専門のスタッフもたくさんいます。(淡々と。以降も)

幹夫 俺がまだ小せえー頃、じーちゃんがボケた時からずっとオトン言よーた、もし俺もボケたら速攻施設入れてくれー言うて、

北野 そりや言うよ…

幹夫 おめーに世話されるなんか絶対断るって、

北野 そう言うって…

加奈 お世話します。ちゃんとあちらで。進度に合わせて適切に介護し見守ります。

幹夫・加奈 さ。

幹夫と加奈、鉈のすぐ近くに手をさしのべて、呼ぶ。

宮本 いやいやこっち、合唱、

団員たち な。

合唱団員たち、逆の方向から手をさしのべる。

松田、腰元の手斧を取り出して、男たちに構える。静かに。

全員 は!?

蛭子 おいまっつーん、

松田 蛇の大群め、(手斧を突き出す)

沢田 松田くんー、

沢田、両手を広げて、呼ぶ。男たちの側から。少し離れて。

無原罪のマリア像と同じ姿で。

松田 …マリア様。(囁く)

沢田 来て。(囁く)

北野 ナイスプレイ!(囁く)

千鶴子 どこが!(囁く)

沢田 リベンジよ。松田くん。

無原罪の沢田、一歩寄って、

沢田 こっち降りて。ね。

松田、そろりと鉈と手斧を降ろす。

団員たち そうっ、(囁く)

沢田 松田くん松田くん松田くん、

松田、そろそろと沢田の方へ向き直る。

団員たち よしっ、よしっ、よしっ、(囁く。サッカー観戦か何かみたいなのに、小さくガッツとかしながら見守って)

幹夫 お父さん、

幹夫、小さく呼ぶ。子供みたいに。わざと。自然に。

松田、幹夫を振り返る。

松田、幹夫の方へ一歩、ストンと降りる。

沢田 いやだあ…(囁く)

沢田、無原罪の手が降りる。

沢田の懐のスマホがまた鳴る。沢田、そのまま服の上から握って、

沢田とともに着信音は遠のく。

○松田と宮本

初冬。夜。

宮本、教室にいる。紙音。

机の上の楽譜の分厚い束を、題名を見て分けている。

次から次へ思いをシャッフルするように。

宮本 …あり、なし、あり、あり、なし、あり、あり、(囁く)

声の中で松田がふらーと歩いてくる。

幹夫みたいに、ポケットに両手をつっこんで。

松田 ようー宮くん、何しよーんな。(どこか若者みたいに。以降も)

宮本 ……楽譜を分けよんじや、クリスマスコンサートの、

松田 へーコンサートすん、すげーな、行く行くー、

宮本 ……いけんがまつつん、こねー遅うに、

松田 マジメじゃのうー宮くんは。まだ夜中まで全然あるが。

宮本 ……脱走か、また。2号棟から。

松田 何じやあ脱走って、脱走なのか俺、脱走かな、脱走かも。さ、行こうで宮くん、車出して。

宮本 若者かー…、どけー行くんな。
わかもん

松田 京子ちゃん探しに行っちゃらにやあー。

宮本 京子…、どけー探しに、

松田 どけー行つとんじやろか、ササモールかな、映画館かな、喫茶店かな、キャンドルかな？

宮本 狭つめえーなあー…

松田 宮くんを探してもらいてーんじやろ、京子ちゃん。

宮本 おめーのうー…

松田 ごめん、ごめんごめんごめんごめんごー、(頭を下げてプラプラとその辺を、

若者みたいに)

宮本 何じやそれ…

松田 俺知つとつたんじやけどー、婚約しとるのー、

宮本 おめー…

松田 許しちやってくれいー。京子ちゃんを。

な、この通り、忘れてくれいー、こないだの夜のことほ。

(プラプラと言って手を合やす。若者みたいに。軽い)

宮本、ゆらりと立ち上がって、京子の机を撫でるように触れながら、

宮本 ……おめーこそ忘れてくれー。

何でそこばあくつきり覚えとん。消し残したみてーに。

松田 や、ホントいうとー、俺な、えれー酔っ払って、こないだ、キャンドルの

帰り道、京子ちゃん、うちの離れまでベロンベロンの俺をこうー肩担いで送って

くれてー、京子ちゃんの髪、えれーパーマ屋の匂いして、俺、最悪で、ゲロ吐いてしもうて

京子ちゃんの肩のこの辺に、(自分の肩をさすって)
でー京子ちゃん肩拭いて拭いてー、でー京子ちゃんまでもらいゲロ。みてーな流れ。
俺の腰のこの辺に、…え、あれ？待って待って、何じゃこれ。

松田、服の左裾に小さなタグ。徘徊者用の名札タグ。

松田、裾を目のとても近くまでたくし上げて引っ張って目を細めて読んで、

松田 ま、つ、だ、あ、き、ら、70、森のテラス2号棟、何じゃあーこれ、名札!?

…ま、ま、ま、えーわ、(裾を降ろして両手でさすって伸ばしながら)えっとー、そ、京子ちゃんちようどここにもらいゲロ吐いてー、でー俺ここ拭いて拭いてー、でー二人そのままつぶれてーって感じ。そして夜明け。

宮本 汚えーのうー…

松田 そんなだけじゃから。何ーもねーから。ゲロかけ合っただけの関係、拭き合っただけの関係、ただ。

宮本 ただとか、汚えわ。

松田 誤解じゃから、

宮本、また座る。まだ分けてない分厚い方の楽譜の束をトントンと揃えながら、

宮本 もうええから、そこ忘れろよ…。このさい全部まるごと…

忘れきってくれ!!!

…俺あの後結婚したが、真奈美と。娘も息子も、孫までおるし。
許す、頼む、まつつん。

松田 …おう、おうおうおうー。(何度も軽く頷いて)
わかった。

松田、手を広げて突き出す。幹夫みたいに、淡々と。

宮本、握手かと手を伸ばすが、

松田 鍵。

宮本 …何の鍵、

松田 スカイライン。俺が回してきちやるから、鍵貸してくれー。

宮本 もうねーってー!!スカイライン!!!

松田 急がんと。こんな寒いー冬の晩に、京子ちゃんどっかで一人、
宮本 遅えーわ。遅すぎらあー、

松田 まだ夜中までは、

宮本 京子、笹越池に沈んどる。

短い沈黙。

松田 何いいー、池かよおおー？！？！（へらへらと）

松田、ポケットに手をつっこんでプラプラと言ひ、
くるりと背を向けて出ていく。

宮本 どけー行くくな。

松田 家帰るー。

松田、プラプラとマリア像の方へ歩いていく。

宮本 帰るって…（囁く）

松田 うちの軽トラ乗って行くー。

おめー行かんのじゃったら俺が迎え行くー。笹越池。

松田、去る。

宮本 嘘ばあ…（囁く）

宮本、楽譜のシャッフルを続ける。

何かの思いをぶつけるように、スピードを上げて。

宮本 あり、なし、なし、あり、なし、なし！なし！なし！なし！なし！

宮本の紙音。合唱団員たち、たくさんの楽譜束を持ってきている。

○合唱団、ナンバー会議

千鶴子 ちよっと待って!!

千鶴子、楽譜の束を机に叩きつける。

沢田 千鶴ー、

仲冬。夕暮。

合唱団員たち、楽譜の机を取り囲む。

松田と蛭子と北野がいない。

千鶴子 北野くんおらんに決めれんが、

宮本 もうぎりぎりじゃから、

千鶴子 じゃからって、

細野 どんどん人減ってきますねー…団長ー…

沢田 どうしたのかしら…北野くんまで…

千鶴子 宮本くん…(怪訝)

宮本 え、わしのせいか、

千鶴子 何言うたん…? 北野くんに。

宮本 何かしたつけ、わし、きたろーに、

細野 そういところじゃないですかー? 団長ー、

宮本 え…

沢田 北野くん、今日部屋から全然出てこないだもん。

千鶴子 入ったの…?

沢田 へ?

千鶴子 あゆみ…北野くんの部屋入ったの?

沢田 入ってない。何度呼んでも出てこないだもん。

ベッドで布団にくるまって。

千鶴子 入っとるが!

沢田 ん? 呼んで呼んでー、覗いただけ。

千鶴子 呼ぶわけ? え、いつもあゆみ、呼んで呼んでーこけーきょーたわけ?

沢田 今日初めて、一回だけ、

千鶴子 何その言い方、全っ然信用できん、

沢田 え何、そこ重要？ 北野くんがどうしたのか心配って話でしょ？

千鶴子 心配じゃからこそ、

細野 風邪ですかね、北野くん、毎晩何度か外出てるし。

千鶴子 え…外？

宮本 そうなん、きたろーまで…、何で外に？

細野 たぶん煙草かと。テラス内禁煙だから、こっそり出てるみたいです。

宮本 あー、風邪じゃったら明日んなったら来るじゃろ、

沢田 来るかしら、あんなに丸まって布団に、

千鶴子 どんなに…？

沢田 ん？

千鶴子 あんなになって、どんなに？

沢田 や、こーうー布団に、

千鶴子 やっぱり！！

沢田 ない！！

宮本 とりあえず！ ね、（楽譜の束を手に）今こけーおるわしらあにできることは、

ここから歌うナンバーを選ぶこと、

北野 ナンバーって、（ヘラヘラと）

北野、来る。後に加奈が付いている。

加奈、腕章と名札をつけている。

千鶴子 北野くん…

細野 井上さん？

千鶴子 どしたん…

北野 ああ、ごめん寝坊。

千鶴子 こんな夕方まで？

北野 ああ、爆睡。

細野 心配して損しました。

沢田 ずっと布団にくるまったままだったから、何度ゆすっても、

千鶴子 ゆすって？

沢田 ん？ 軽ーくよ、

北野 ああ、全然俺、超爆睡してたわー。

宮本 ちよ、何で？（北野の後に立って見ている加奈を指して）

北野 ああ、

加奈 付添いです。

北野 監視だよまるで、まいったなー、

加奈 北野さん：

北野 煙草煙草ってまーうるせー、

加奈 煙草だけの話じゃなくて、身体が、

北野 ああーうるせー、

千鶴子 北野くん：

北野 お、これかーナンバー、

北野、楽譜を手にして、

宮本 やりにきーわ、(加奈の方)、

北野 ああ、気にすんな、

宮本 えれー視線がこつち来るが、終わらせる気満々で。

加奈 別に？(後方の椅子に座る)

北野 ほらほら、さ、ご機嫌なナンバーを決めようぜー、(ヘラヘラと。両手に楽譜の束を掲げて)

宮本 じゃ、こん中から、みんなで3曲選びます。

北野 え3曲？少ね、

千鶴子 もう40年ぐれーこれでやりよーるよ。

沢田 すぐ終わっちゃう、

細野 コンサートなのに。

加奈 大丈夫。どうせ入退場でもたつくから、毎年。

宮本 入ってこんで。知ったふうな口で、

加奈 そりゃー知ってますよ。子供の頃から見に行かされてましたから。3曲のために。

北野 コンサートって言ったら普通20曲ぐらいやるだろー、

宮本 ロックスターじゃねーんで？

千鶴子 武道館じゃねーんで？

宮本 なんせササモールですから、ショッピングセンターですから。

加奈 エスカレーター前特設ステージです。

千鶴子 もう40年ぐれーあそこで、

宮本 3曲が限界です。

沢田 もつたない、もっと聞きたい。

北野 ほら、ファンが、
千鶴子 どうせ来年もやるんじゃないから。
加奈 来年やるとは限りませんよね？ いつ死ぬかもしれん歳きとるのに、前の団長みたいに。
全員 え……
宮本 ちょいちょい入ってこんでくれます？
加奈 だって、実際の話、何の予想もなく急にですよ。
北野 不穏だなーおいー、（ヘラヘラと）
細野 ライフパートナーがそんなー、
宮本 みんな、蛇の口車に乗っちゃーいけん、アイツはどうにか合唱団を終わらせようとしてきよーる、
千鶴子 そうじゃ、うちらあはまだまだ死ぬとかそんな、
北野 ああ、そうだよ、
沢田 もの足りない、宮本くん、せめて5曲。（手を開いて宮本に）
北野 ナイスプレイ、（囁き）
宮本 じゃー仕方ない5曲にしますか。
加奈 え？
沢田 やった、（囁き。5をピースに）
北野 よし、（囁き。ピース）
加奈 ゆるい！団長、
宮本 譲歩ですよ譲歩。
細野 はい、じゃこの中から新しい5曲のセットリストを組みましょう。

細野、楽譜束を再度みんなに、

加奈 セットリストって、
宮本 ロックバンドじゃねーんじゃないから、
細野 セトリ、
宮本 何で細野さんがそねーここに積極性出してくるわけ？
細野 あ僕、こう見えてもまーまー楽曲詳しいんで。（なんか加奈に。以降も）
千鶴子 そうなん！？意外。細野さんー、
細野 東京でめっちゃめっちゃ聴きに行ってたんで。生なまで。
沢田 すごい、生で！？細野さんー、
細野 僕、電気工業系の超大手企業の金の卵だったんで、終業時間も休日もきっちりされってたん

で、相当音楽鑑賞してきましたよ。生で。

北野 団長、音楽監督きましたー、（机に手をつき、杖を上げて）

沢田・千鶴子 わあー（拍手）細野さんー、

細野 いやあー恐縮です。（ちよつと礼。加奈に）僕、三度の飯よりジャズが好きなんで。

加奈 ジャズ関係なくない？

宮本 あー関係ねーわ、合唱じゃし残念、

細野 もうそのへんの垣根とつぱらうちやっついていいんじゃないです？団長、

北野 という監督？

細野 だって、現状ピアノ伴奏者いませんよね？

アカペラで4パート1人ずつの男声四部合唱ですよ？

これってもう我々既に、バーバーショップスタイルですよ、

沢田・千鶴子 バーバーショップ？

北野 床屋？

細野 そう、昔アメリカの田舎町の床屋で、居合わせた男たちから自然発生した、

男声四部コーラスのスタイルですよ。

沢田・千鶴子 えー、（歓声。なんか二人、宮本にタッチ）

北野 ぴったりだな、

細野 団員の少なさを逆手にとるんですよ。

バーバーショップハーモニー、どうです？団長。

宮本 …まーまーいいけど、

沢田・千鶴子 きゃー、（歓声。なんか二人互いにタッチ）

加奈 無理ですよ絶対。楽譜全部編曲がいりますよ？バーバーショップスタイルの和音構成に。

細野 あれ？お詳しいですね。さすがは元団長兼ピアノ伴奏者兼音楽監督の娘さん。

宮本 そうじゃ、いのっちピアノやら教えよーたのうー、小せー頃からおめーに。

加奈 何な、

北野 団長、編曲者きましたー、（机に手をつき、杖を上げて、なんか身体へロへロ）

宮本・細野 おおー、（拍手）

加奈 北野さん…！（北野を介助しようと、上げた杖に手を）

北野 本人の手が挙がりましたー、

沢田・千鶴子 やったー、（歓声。なんかみんなでタッチとか）

加奈 は！？

細野 井上さん、アレンジャーはあなたが。バーバーショップ特有の、五度圏の和音進行に、

細野、握手の手を加奈に差し出す。加奈、差し出さない。

加奈　せんよ、うち絶対^{ぜったい}。

…ていうかできませんよ皆さん。…男声メンバー既に足りてないですし、もう本当にこの場所は作業棟に、

松田　プーーーーー、（ピッチパイプの音）

松田、来る。ピッチパイプを長音^{ながおん}で吹きながら。

後に幹夫が付いている。分厚い楽譜の束を持って。

幹夫　オトン、ちよ待たれー、

松田　プーーーー、（ピッチパイプの音）

松田、吹きながらちよっと礼。

北野　指揮者きましたー、（机に手をつき、杖を上げて、無理に。もうなんか声出ない）

加奈　松田さん、

幹夫　勝手に家^{いえ}に取り帰ってから、

蛭子　なあ…

蛭子、ゆらりと戸口に、

宮本　エビちゃん…

北野　メンバー揃いましたー、（絞るように囁く。机に手をつき、杖を上げて）

蛭子　どういうつもりな…

宮本　…は、

蛭子　…加奈ちゃん。

加奈　はい？

蛭子　聞いたで。…おめー林、全部売ったって。

加奈　はい。

千鶴子　加奈ちゃん、アンタ…！

加奈　意味ないですよ。持ってたって。（淡々と）

…父が死んでいきなり山主になって私、やり方もわからんし、

…下草ぼうぼうで放つとるだけじゃし、むだ毛ぼうぼうみたいに、あそこは千年杉の植わつとろう？

宮本
蛭子 いのちちも、囁谷の者らあもずつと大事に守りよーた、

加奈 知ってますよ、そんなこと。

蛭子 じゃったら、

加奈 守っていく手段ですよ。この先永遠に。私ら子供が。

蛭子 永遠？

幹夫 ですよ。ここから未来、

加奈 プロジェクト、うちの林は元々大事な場所だと聞いてました。

(指して) 1号棟、2号棟、3号棟、4号棟と順に進んで、あそこは、

千鶴子 あそこは――、

加奈 共同墓地になります。

沈黙。

加奈 千年杉のたもとで、樹木葬の。

みんな、あの千年杉の方を見る。

沈黙。

松田 プーーーー、(ピッチパイプの音)

蛭子 樹木葬？

沢田 木の下で、寝るのよ。みんなで。隣合って。

宮本 みんなって、

沢田、北野と細野の間へ歩き、手を伸ばして二人の肩に触れる。

北野 ああ、

細野 銀の卵。

蛭子、愕然と松田と宮本と千鶴子を振り返る。

蛭子 何じゃあー！…

沢田・北野・細野と、松田・宮本・蛭子・千鶴子の間に見えない遠い遠い距離がある。

沢田　ありがとうー、加奈ちゃんー。

私、希望だったんだア。囃谷へ帰ってくる希望。

いつしか近い未来、故郷こきょうの土になって、それから木になるの。千年の。

加奈　再生プロジェクトです。

沢田　私、右隣で寝る人にもこうー手を伸ばして、左隣で寝る人にもこうー手を伸ばして、根をはってやるのよ。いっぱい。

沢田、右隣と左隣の北野と細野に手を伸ばして繋ぎ、大きく足を開く。

幹夫　過疎地域再生プロジェクト。

蛭子　そねーええもんじゃねーわ、現実、要介護度が上がることに1号棟から順番に4号棟へ、金ばあ払うて、すぐろくみてーに1コマずつ移って行って、最終あそこへ、

北野　知ってるよ。最初っから。

細野　ええ。

蛭子　…都会の金持ちは違うのうー。

沢田　蛭子くんー、

千鶴　こつちとそつちは違うんじゃね、最終行きつくところは…

沢田　千鶴ー、

加奈　マリア様も移って行きます。千年杉の枕元に。

幹夫　林内りんない作業車入れて、吊り上げて、宙ちゆうを飛んで。

北野　ワーブだな。

加奈　ここの扉も鍵も変わります。明日には。

蛭子　明日…？

加奈　明日から、始まります。

蛭子　強行封鎖か…！

加奈　新しい銀の卵がよそから次々やってきます。ここで木工するんです！

北野　木エー…！！　小せえ頃から嫌だったよ、ここには木しかないみたいで、

幹夫　じゃから再生じゃが！

進んでいきよーんよ。町も、人も。

宮本　では、囃谷シルバー男声合唱団、ナンバー会議を始めます。(静かに)

宮本、通例のように、メトロノームを自分の前へ置く。

加奈 シルバー、

宮本 銀の卵とのドリームチームです。

松田 プーリー、(礼しながら、ピッチパイプの音)

合唱団、通例のようにちょっと礼をして、静かに着席する。

蛭子だけ、その輪に立ち入れずに立って見ている。

宮本 どう選ぶか、5曲のナンバー、(楽譜に机に広げながら)

沢田 1、2、3、4、5、(男にひとりひとり触れて数えて) ちょうど男性5人よ。

千鶴子 そうじゃ、1人ずつ好きな曲は？

細野 いいですねー、

加奈 選んでも練習場所がないですよ。

沢田 平気よ。どこでだってできるわ。林の中でだって、

北野 俺の好きな曲かー、何だっけなー、

細野 たくさんありますよー、好きな曲、

加奈 時間もありませんって、練習の。

宮本 なあエビちゃんー、そんな顔せんで、ほら何の曲にするんかのー、(楽譜を蛭子の方にもどんどん広げて)

沢田 お気に入りのナンバーを。(楽譜を机じゅうにどんどん広げて)

幹夫 もう来月に迫ってるが、クリスマスは、

北野 明るい曲がいいな。

宮本 子供らの喜ぶ曲がええがー！ わしらあサンタのじーさんじゃがー！

松田 プーリー、(ピッチパイプの音)

加奈 子供なんか来ないってー！

千鶴子 じゃあ若者に響く曲。聖なる夜じゃから。

幹夫 若者はみんな隣のイオンモールに行っとる！

加奈 老人だけじゃあー！もうササモールは！

幹夫 もしくは俺みてーな近場であきらめた中年ばあじゃあー！

加奈 もう聴く者もおらんに……！

松田 知っとるよ。(穏やかに)

松田、加奈の方へ歩き、頭をなでる。子供にするみたいに。井上みたいに。

松田 もう何十年と見てきとる。加奈。

加奈 ……父さん…

加奈、奪い取るようにそこらじゅうの楽譜を抱え込みながら、

加奈 じゃあ何で歌うん？…父さんも、よその父さんもじーさんも！

何でこねーなどで合唱なんか歌うん！?!?

宮本、楽譜を揃えながら、淡々と、

宮本 本当言うと、何かしょーらんと、叫び出してしまいそうじゃ。

狂うてしまいそうじゃ。他に何んーにもねー、こんな僻地じゃあ。

加奈 しょーもねー……！

加奈、手の中の楽譜を投げ捨てる。次々と。そこらじゅうのも取っては投げる。

次々と。

白い紙だらけ。

その中で北野、煙草に火をつけて、一つ息を、

加奈 北野さん、煙草って……！

加奈、しゃくり上げるように言って、楽譜を投げる。

加奈 やじゃ、やじゃ、やめてって……！

次々楽譜を投げる。

北野、悠然と吸いやめない。

加奈の懐のアラームが鳴る。

加奈 ほら時間がくる…

幹夫 北野さん、お薬の時間です。——3号棟へ。

北野、悠然と携帯灰皿で煙草の火を消して、

千鶴子 ……3号棟…

北野 ワープかよ。(不敵に笑って)

北野、悠然と行く。

アラームの中、暮れていく。

そろそろと戸を出ていく老人たちが影になって。

蛭子だけ離れて残るが、蛭子も去って。

○宮本と沢田

アラームも去った。夕闇。

宮本と沢田だけが教室に残っている。

ふたりで紙を拾っている。沈黙。長く。

拾うばかりの二人。暫く。

沢田 ……宮本くん。

沢田、拾いながら、

宮本 ……ん。

宮本、拾いながら、

沢田 ……宮本くん、

宮本 ……はい、

沢田 ……話すことないね。

宮本 ……うん。ないな。

また拾う。暫く。

沢田、拾った楽譜を宮本の胸元へ。

沢田 はい、

宮本、受け取って自分の拾ったものと一つに束ねて、後手に置く。

宮本 うん。

宮本、懐から褪せた黒いレース縁の葬儀用ハンカチを出して、

宮本 これ、

沢田 ……あ。

宮本 長い間、

宮本、沢田に差し出す。

沢田 いいのに、もう。

宮本 持っとしても、だって。

沢田、懐から宮本のハンカチを出して、

沢田 じゃあ、仕方ない、はい、交換…

沢田、ハンカチを差し出す。

宮本 あー、うん。

宮本と沢田、受け取り合う。

沢田、無意識に宮本から戻ったハンカチの感触を確かめるように、
親指で撫でながら、

沢田 ……あの時がよかったよ。

沢田、何の気なしにハンカチを口に当てながら、

沢田 まだ若かったあの時に、してほしかったよ。

宮本 20ー終わりか、30入ったぐれーじゃなー、

沢田 私、一度だけ東京から帰ってきた時。父親が死んで。

宮本 あー、

沢田、話の間中、宮本から戻ったハンカチを何の気なしに広げたり手で弄んだりしながら、

沢田 宮本くん、最後車で送ってくれて、京子に内緒で。(ハンカチが広がる)

宮本 笹越池。ほとりの路肩。

沢田 白い車。ピカピカの。

宮本 スカイライン。(少し笑う) 止まってもうた。突然。

沢田 そう、ケンとメリーの。(少し笑う) 動かない。

二人、目が合う。動かなかったその時間を想う沈黙。ぎこちない。

沢田、自分の机にもたれるように浅く腰掛ける。

沢田 見てきたのよ。池。

ここへ来る時。あの雨の日。

宮本 じゃろーなって。迷ったいうて。

沢田 浅かった。こーんなに浅かったっけーってくらい。変よね。雨降ってんのに。

宮本 嘘みてーに浅えんよ。もう今じゃあ。乾いとる。誰も溺れん。

沢田 下りてみたの。柵越えて。水ん中。

宮本 あー、荷物。

沢田 うん、荷物だけ濡れた、膝下で。ぬかるんで、迷って、捨てた。

宮本、沢田から戻ったハンカチを幾重にも小さく畳んで懐に押し込む。

と、こみあげるようにヘラヘラと、

宮本 なー、まっつんがなー、

沢田 うん、

宮本 ずーっと、自分のせいじゃと思うとるー。

沢田 何で松田くん？

宮本 やー、何でじゃろうー、何か勝手にこじれてー。わかりあえんー。

宮本、松田みたいにプラプラと歩きながら、ヘラヘラと言う。

沢田 ひどいねー。(ヘラヘラと)

宮本 そうー？

沢田、宮本みたいに幾重にも小さくハンカチを畳んで、

沢田 これのせいでしょ、

宮本 ん？

沢田 これ見て京子は、

宮本 ……

沢田、畳んだハンカチを懐に押し込んで、

沢田 宮本くん、

宮本 ん？

沢田 宮本くん宮本くん宮本くん宮本くん宮本くん

宮本 何じゃ、

沢田 …宮くん、(小さく)

宮本、なんか沢田を抱く。急ぎ立てられるように。

沢田、そのままの姿勢で、

沢田 …いけんねえー、

宮本 …慣れきつとるのうー、沢田さん、

沢田 わかっとるよ、私。もう何の価値もねー。何ーんも残つとらんー。

宮本 そうなんー、

沢田 くつついて、離れて、くり返して、それだけの作業じゃったように思うよ。
これまで。

沢田、宮本の肩に両手をかけて身を離す。手をかけたそのまま、力をかけ合って、

宮本 作業かー。

沢田 縫製工場ではね、朝から晩まで電動ミシンの前に座るんよ。

まるで一つの身体になったみてーに。電動の。

宮本 うん、

沢田 何着も何百着も縫い合わすん。ものすごい速さよ。

私、なんだか毎日、自分の身体が縫い付けられて、そけーそのまま幾重にも磔り付けになるような気がした。ダダダダダーーっと。

宮本 ふーん、

沢田、自分の服の縫目を下から人差し指で辿って、

沢田 細い糸で、目をこらして、小つちえー針目で、スカートの裾、わき、腰回り。

(宮本のシャツの縫目へ、下から) シャツの前身頃、後見頃、袖口、肩、襟元、見返し。

宮本の襟元に指を立てる。

宮本 何、見返して、

沢田 裏。ここの、

沢田、宮本の襟の裏に親指を差し入れた。

宮本 あー、見返し、

沢田 引きちぎって、逃げ出したかった。けど、見返された。

宮本、沢田の襟元の見返し(首)に顔をうずめた。

沢田の着信が鳴る。

沢田、放置。そのままの身体で、

宮本 ずっと何回も、どっから。

沢田 知らーん、いろいろー。

宮本 嘘じゃ、誰からな！

沢田 東京の生活。

宮本、沢田と机に。ふたりで流されて、なだれ込む。

沢田 …あ。京子が、

背中の下、京子の机。

宮本 ……

沢田 京子の罨にはまりよーる。

宮本 罨。

沢田、ケラケラとすり抜ける。

宮本、京子の空席を見ている。

沢田 死の手前でじゃれ合って。

どうーしょーもねーのに、こんなことしたって。

沢田、紙を拾う。とり憑かれたように。次々片付ける。床を這うように。

宮本、立ったまま、その沢田の姿を見下ろしている。京子の机越しに。

飼主みたいに。残酷に。

宮本だけ密かに官能を感じている。

拾う長い間。

沢田 見ないで。(小さく)

宮本、見ている。

沢田ばかりが拾う。

沢田 拾って。

宮本くん…

宮本、拾わない。

沢田、拾ったたくさんさんのバラバラの楽譜を胸に抱いて、宮本を振り返り、

ゆっくりと立ち上がる。溶暗。

溶けるように暗闇に飲まれていく。ふたり。

着信は鳴り続ける。

○北野と千鶴子

暗闇の中に小さな火種が見える。

溶明。北野、煙草を吸っている。

師走。夜。

マリア像はもうそこにはない。

千鶴子が来る。

千鶴子 …あ。

北野 あ、

千鶴子 またじゃ。いけんのに。北野くん、

北野 いいよ、もう煙たくない。

千鶴子 え？

北野、囁谷マリア様のいないそこを見上げて、煙を吐く。

煙が上る。

千鶴子 ホンマに行ってしまったねえ。

北野 ああ、まるでなかったことみたいに、立ち去って。

千鶴子 扉も鍵も真新しい。立ち入れん。(窓から中を見て)

北野 泉、

千鶴子 ん？

北野 お前もどけー行きよーん。

千鶴子 何が…

北野 今。

千鶴子 今は…

北野 3号棟か、4号棟か？

千鶴子 …え、

北野 次割れるんは、どこの窓じゃろか。泉、

千鶴子 …さあ、

北野 この窓か？（教室の窓を指して）

千鶴子 うち知らん。

北野 治らんの？

千鶴子 へ、

北野、千鶴子の頬に手を伸ばす。

北野 傷。

千鶴子 や、

北野 もう何か月もたつ。剥がしてええ？

千鶴子 やじやって！

北野 見せるよ！

北野、煙草をくわえて、千鶴子の顔を掴んで、頬のテープを剥がす。
ゆっくりと。

千鶴子 あーあ。

北野、剥がした頬を見る。煙草を手に戻して、ひとつ煙を吐いて、

北野 きれいじゃが、全然。

千鶴子 跡が残つとるが。（頬を押さえて）

北野 何ーんもねーが。まるで元々傷なんかかったみてーに。（へらへらと）

千鶴子 暗くて見えんだけじゃってー。（へらへらと）

北野 泉、

千鶴子 何よ、

北野 興奮する？ 知られずに壊すの。

千鶴子 しない、そんなの。北野くんさあ、

北野 何じゃ、

千鶴子 煙たい。煙草。

北野 ああー、

千鶴子 ……治らんの？ ねえ、北野くんは…

北野、他所を向いて、美味そうに煙を吐く。

北野 ああー、じゃなー、治らんなー。

千鶴子 ……そう。

千鶴子、マリア様のあった空を見上げる。

北野 いないよ、見たって。

千鶴子 神々は、いたるところにいます。(マリアのいたそこに立って)

北野 いますか。な、泉、外国行ったことある？

千鶴子 ねえー、一度も。何急に。

北野 じゃと思った。

千鶴子 北野くんは？

北野 いっぺー行った。会社作ったあと。ビジネスでもバカンスでも。(少し笑って)

千鶴子 ええねえー。ずっと店。ここの山しか見やらなかった。

北野 行く？(ヘラヘラと)

千鶴子 行く。(ヘラヘラと) オーストリアの山よ。

北野 何でそこ？

千鶴子 うち、映画で見たんよ。北野くんらあがここを出てすぐ、16ん時。笹越のできたての映画館。オーストリアの、ザルツブルグの青い山並。同じ山じゃけどどここと全然違う。明るくて、美しい。

北野 ああ、

千鶴子 マリアという名の歌の好きな先生がいて、お金持ちの不機嫌な大佐がいて、たくさんの子供らあと山で歌うん。

北野 ああ、えれー流行ったなー。あの頃。その映画。

千鶴子 スイスへと亡命するんよ。アルプスの尾根伝いに。

北野 スイスか。…安楽と尊厳の国だな。

千鶴子 ……そうね。…逃亡する？

北野 すべての国境線が封鎖されて、夜のうちに人目を逃れて、すべての山を越えて。

千鶴子 うん。歌いながら。

北野 うん。泉、またお弁当作って持ってきて。

北野、ゆっくりと歩き出す。杖。

千鶴子 うん、そうじゃねー、北野くん。

北野 サウンド・オブ・ミュージックじゃな。

千鶴子 あの県境けんかくを越えてー。(笑って)

千鶴子も後についてゆっくりと歩き出す。

蛭子が歩いて来る。チェーンソーを手に。

二組、立ち止まる。

北野 ああ…

千鶴子 蛭子くん…

蛭子 千鶴ちゃん…

千鶴子 ごめん、見逃して。

蛭子 こっちこそ。

二組、道を譲り合って行き交う。

千鶴子と北野の行く方を見て、

蛭子 そっちは70年の林。

(また別の方を見て) こっちは50年の林、向こうは30年の林。

伐って育てて、(もうない杉の木を数えるように) また伐って伐って育てて育てて、
また伐って、続いてきたんよわしら。

チェーンソーを手にした蛭子、扉の方へと歩いていく。

蛭子 …魔王め。

蛭子、扉の方を見て、チェーンソーを構え、扉の角に消える。

扉の前へ立ったであろうその姿を見送って北野と千鶴子、微笑んで、

歩いて去る。

小さい風が吹く。木々の葉が小さく擦れ合うと、誰か数人の囁く声のするような。囁き声の強まるような。暫く。

くつきりと、教室の扉の形に光が差し込んでいく。その中に、幹夫と加奈が入ってくる。ユニフォームの上にジャンパーをかけて寒そうに。

○囁谷シルバー男声合唱団

クリスマス前。午前。

幹夫と加奈、扉から入る光を複雑な顔で眺めながら、

幹夫 ……ホンマになってしもうたな。ぐつつちゃぐちゃに。

加奈 ……言うたろう。ぐつつちゃぐちゃ、新しい鍵も扉も。

幹夫 ……寒みーね。風穴が開いて。

加奈 ……もうクリスマス前じゃというのに。

加奈、机と椅子を動かし始める。

幹夫 あ、もう外出しとく？

加奈 や、とりあえず分けとく。雨降りそうじゃし。

幹夫 よかったが、捨てずに済んで。

加奈 うん。椅子だけこっち残して、大きい作業台が入るって。

幹夫 うん。

加奈 この机は4号棟のレクレーションルームに。

あとは4号棟のスタッフ達が運んでくれよう。

幹夫 別々じゃーなー。

加奈 うん。

幹夫 ……これもこの谷の木で作ったんじゃろうな。昔、誰かが木工で。

幹夫と加奈、机を椅子を分けていきながら、

加奈 ……な、町が消滅するってどんな感じじゃろう。

幹夫 消滅、

加奈　しよるが。いろんなところで。次々。人が減って、若えー女が半分減って、子供の増える見込みがなくなってる。

幹夫　あー、消滅するんは名前じゃねーん。

加奈　あー、名前かー。

幹夫　自分の町の名前が消滅するってことじゃろ。

そけーその名前の町があったことを知る人も消えて。

加奈　うん。人と同じじゃね。

加奈、置き忘れられたメトロノームを手にとって、ねじを巻きながら、

加奈　あの人がおらんようになって、あの人の名前が消滅して、

そけーあの人がおったことを知る人も消えて。

加奈、マリア様の窓の枠にメトロノームを置いて。

幹夫　名前ばあ消えていくんじゃ。次々と。

加奈、錘を一番上まで上げて、針の押さえを外す。

ゆっくりと振れる振り子を見ながら、

加奈　まだ消滅しとらんのに、まだこけー踏みとどまっとんのに、誰ーれも知らんけど。

囁谷なんて場所の名前。

戸口に宮本が立つ。

メトロノームの規則音の中。

加奈　…あ、

宮本、入ってくる。静かに、ゆっくりと。

宮本、正装している。黒の。衿元は開いた。

加奈・幹夫　…何い、

加奈と幹夫、目を奪われている。

次に蛭子、入って来る。同じ、黒の正装で。

その次に細野、入って来る。同じ、黒の正装で。

幹夫 ……どしたんな。

宮本 リハーサルです。

蛭子 出番がきて、いざというときに、もたつかないように。

細野 あわてないように。

宮本 今年こそじゃ。

加奈 や、その格好。

蛭子 舞台へ上がる正装じゃが。

沢田、入って来る。静かに、ゆっくりと。

胸と肩の開いた、黒のロングドレスで。

宮本 沢田さんが。

沢田 私、得意なのよ。

縫製工場ではね、何着も何百着も縫ったの。朝から晩まで。15の時から。

加奈 ああ…

宮本 ピッタリじゃろうー。ほら。

宮本・蛭子・細野、幹夫と加奈に自分の服を見せる。

北野と千鶴子、入って来る。

千鶴子、沢田と同じ、黒のドレスで。

北野、同じ、黒の正装で。

全員、まるで死へ向かう葬列のような黒。

千鶴子 ね、うち何すりゃーええん。こんな恰好で。恥ずかしい。

北野 見るんだよ。そばにいて。

蛭子 得意じゃが千鶴ちゃん。見とくの。

沢田 特等席の観客よ、私たち。

北野 ^{ビップ}VIPだな。

細野、机の元に。

細野 おお、ほら、ちょうど机が、

加奈 何すん、机、

細野 幹夫、手伝え、

幹夫 え、

男たち、机を長方形に集める。

机ステージの両脇後方には椅子が一脚ずつくっついて踏み段用に。

加奈 ねえ、何作りよーん。

千鶴子 エスカレーター前特設ステージ。

沢田 加奈ちゃん、今後しっかり支えてて。みんなが落ちないように。

男たち、机ステージの両脇遠くに分かれて立つ。

沢田と千鶴子、両脇の段下の手前に内向いて立つ。見上げる形に。

加奈と幹夫、両脇の椅子でしゃがんで押さえて支える。

宮本 では、マネージャー二人がこう一人差し指を上げたら、歌い出しの合図です。

全員 はい。

遠雷。

沢田 ……あ、冬の雷。珍しい。

加奈 ……ね、松田さんは。

千鶴子 一緒にいたんよ。つい着替える前まで。

沢田 帰っちゃった。

幹夫 ……どけー！

千鶴子 (冷ややかに幹夫を見て) 2号棟じゃろう。だって。

沢田 レクレーションルームでお遊戯してる。

加奈 ……呼んでこれんの？(幹夫に)

沢田 何言ってるの。(冷ややかに二人に)

加奈 だって松田さんがいないと…いないと…!!

遠雷。

蛭子 な、倍音って知ってる？

加奈 ……ああ、

幹夫 倍音、

宮本 倍の音って書いて。

蛭子 長^{なが}うやりよーたら、耳が勝手に聞くんよ。あるはずもねー音。

細野 その誰も出していない、もう一つの不思議な音です。

北野 幻みてーなハーモニーだな。

宮本 まっつんの声も、いのっちも、京子や毛利や、もうこけーおらん者らの声も、

囁いて、共鳴して、

蛭子 倍音となって――

宮本、メトロノームを止めて、静かに、

宮本 では、囁谷シルバー男声合唱団、クリスマスコンサートを始めます。

男たち、一人一人順に歩いて登壇する。

耳に残ったメトロノームのリズムの歩みで。

加奈・幹夫、両側で椅子を支えている。

両側から蛭子↓宮本、細野↓北野

北野は杖なので、ゆっくりと、加奈の手を借りながら。

男4人、並んで机上に立つ。

遠雷。

沢田と千鶴子、人差し指を上げる。

沢田 あ…煙。

全員 ……え？

千鶴子 どこ？

沢田 あそこ。

沢田、上げた人差し指を指して、

沢田 一号棟の向こう。下の林、

千鶴子 煙なんか見えない、

沢田 落ちた？雷。

細野 落ちた音なんかしない、

沢田 ほら、杉の木に火の粉が、

宮本 見えんよ。

沢田 何で！？ 北野くん、煙草ちゃんと消した？

北野 ああ、消したよ、

沢田 千鶴！店の火消した？

千鶴子 見えまー！そんなとこまで、アンタの目！

沢田 だって、下の林が燃えてる！

松田、戸口に立つ。

松田 ただいま。

幹夫 ——オトン、

松田 おう、幹夫。

幹夫 何しよーたん？

松田 コーヒー飲みよーた。家で。いつもの朝の。

幹夫 へ……

全員 ああ……

沢田 うしなう——

松田、椅子を一つ手にして、机ステージ下の中央へ。

自分で椅子を置いて、静かに一段、上る。

男たち、その松田を見て穏やかに微笑んで。脚を開き、基本姿勢をとる。

沢田 待ってってば、ねえあそこ、

松田、沢田を向いて、穏やかに、人差し指を口に当てる。男たちも。

松田 ゆっくりと、乱れないように。

松田、沢田に囁いて、呼吸練習のキャンドルを吹くように、静かに息を吹く。男たちも。

沢田 見えるでしょう??!

松田、ピッチパイプで音をひとつ出す。

沢田 ほら、下から火の手が、

松田、人差し指を高く上げる。

男たち、顎を上げる。鼻から息を吸って、第一音の口を開く瞬間、暗転。

初めて音楽。

(My Favorite Things)

カーテンコールの明かり。

囁谷シルバー男声合唱団がそこに立っている。

男5人、礼。

音楽の中で、男5人、机ステージを降りる。女2人が手を貸して。

全員並ぶ。

沢田、右隣の人にも左隣の人にも手を伸ばして、樹木葬のように。

全員礼。一人また一人と教室を去る。

松田↓北野↓千鶴子↓細野↓蛭子↓沢田↓宮本

彼らがいつか世を去る日のように、シンプルに立ち去る。

去って行く先は、あの県境の方。

列をなして、樹木葬の林の奥へ。

幹夫と加奈が残されて、礼。若い二人もそれぞれに去る。

音楽は鳴り続ける。

※参考Ⅱ

「魔王」 シューベルト作曲 ゲーテ作詞 大木惇夫・伊藤武雄日本語詞

「The Sound of Music」 1965年6月日本公開

ロバート・ワイズ監督 アーネスト・レーマン脚本

※この戯曲の上演を希望される場合は、作者・角ひろみまでご連絡ください。

hiromii85@yahoo.co.jp